

## 概念メタファーの体系性は

### (文法の体系性と同じく) 錯覚ではないのか?

—概念メタファー理論における概念メタファー認定の杜撰さが導くところ—\*

黒田 航

独立行政法人 情報通信研究機構 けいはんな情報通信融合研究センター

#### 1 はじめに

この論文で私は Lakoff らによって提唱された概念メタファー理論 (Conceptual Metaphor Theory: CMT) の経験的妥当性問題を議論する。具体的には、私はこの論文で特に二つの概念メタファー [[ TIME IS MONEY ]] と [[ TIME IS A RESOURCE ]] [31, pp. 161–169] を取り上げ、概念メタファー理論の概念メタファーの認定がいかに杜撰で我田引水、かつ自家撞着的なものであるかを検証する (本稿では “*T is S*” (*S*, *T* はおのおの元領域, 先領域) という特徴づけが概念メタファーであることを明示するのに [[ *T IS S* ]] という表記を用いる)。§2 では [[ TIME IS MONEY ]] を扱い、§3 では [[ TIME IS A RESOURCE ]] を扱う。

概念メタファーの研究を一部の研究者の名人芸的直観による恣意の汚染から守り、実証的なものとするため、私は概念メタファーの候補の発見手法 (§3.1.1) , 並びに発見された候補から概念メタファーを認定する基準 (§3.2.2) を定義する。

その結果に基づいて、私は次のように結論する:

- CMT の概念メタファーの認定が杜撰である限り、それは常に過剰般化をもたらす「不良」理論である。
- CMT は一般性と例外性を混同している可能性が高い。
- CMT は反証不能ほど強力で「空虚」な理論であるか、反証可能だが自明な内容しか主張しない、「些細」な理論かのいずれかではない。

#### 2 [[ 時間はお金である ]] の妥当性の検証

Lakoff と Johnson [31, pp. 161–169] では、太字体の語句の語法の説明に [[ TIME IS A RESOURCE ]] という概念メタファーが使われている。

- (1) a. *You have some time left.*
- b. *You've **used up** all your time.*
- c. *I've **got plenty of** time to do that.*
- d. *I don't have **enough** time to do that.*
- e. *That **took** three hours.*
- f. *He **wasted** an hour of my time.*
- g. *This shortcut will **save** you time.*
- h. *It isn't **worth** two weeks to do that.*
- i. *Time **ran out**.*
- j. *He **uses** his time efficiently.*
- k. *I **need** more time.*
- l. *I can't **spare** time for that.*
- m. *You've given **a lot of** time of your time.*
- n. *I hope I haven't **too much of** your time.*
- o. ***Thank you for** your time.*

[[ TIME IS A RESOURCE ]] の定義は、

- (2) “The Time Is A Resource Metaphor is a mapping that applies to a conceptual schema that characterizes what a resource is” (p. 161)

というものである。なお、付録 A に問題の概念的スキーマ —これを Lakoff らは (経験的妥当性とはもかく) 資源スキーマ (**resource schema**) と呼ぶ— の具体的規定を紹介しておいた。

##### 2.1 概念メタファー写像理論の (誤った) 予測

もし概念メタファーがヒトの思考パターンを決定するほど強力なものであるという強い解釈の下で

\* この論文は KLS26 に掲載された [62] の完全版である。

は、『時間はお金である』(『TIME IS MONEY』の日本語版)という概念メタファーに関するCMTの理論的予測は、

- (3) もし『時間はお金である』という概念メタファーが妥当な一般化であるならば、 $X$ という項が『お金』であることを許容する動詞(e.g., “かかる”, “費やす”, “支払う”)は例外なく $X$ が『時間』であることも許容する。

ということである。「概念メタファーがヒトの思考パターンに関係している」という弱い解釈では、このような予測は成立しないが、その代わりに、CMT自身はそれほど興味のある言語と思考の説明モデルではない。CMT自身がLakoffらが主張するほど強力で、興味ある言語と思考の説明モデルであるためには(3)の一般化が成立することが不可欠である。

このような背景の下で、私は(3)の一般化が正しいかどうかを以下の(4)–(7)に挙げた動詞ごとに確かめてみた:

- (4) 『支出』に関する表現
- $Y$ に $X$ がかかる
  - $Z$ が $Y$ に $X$ をかける
  - $Z$ が $Y$ に $X$ を払う
  - $Z$ が $Y$ に $X$ を支払う
  - $Z$ が $Y$ に $X$ をさく
  - $Z$ が $Y$ に $X$ を費やす
- (5) 『損得』に関する表現
- $Z$ が $X$ をもうける
  - $Z$ が $X$ をかせぐ
  - $Z$ が $Y$ で $X$ を得する
  - $Z$ が $Y$ で $X$ 得する
  - $Z$ が $Y$ で $X$ を損する
  - $Z$ が $Y$ で $X$ 損する
  - $Z$ が $Y$ で $X$ を失う
  - $Z$ が $Y$ で $X$ 失う
- (6) 『省力化』に関する表現
- ( $Z$ が) $Y$ ((するの))に $X$ を省く
- (7) 『必要性』に関する表現
- ( $Z$ が) $Y$ ((する))には $X$ が必要
  - ( $Z$ が) $Y$ ((する))には $X$ が要る
  - ( $Z$ が) $Y$ ((する))には $X$ を要する

課題の内容は次の通りである。

以上の例で、(8)のおのこの要素について、それが $X$ の値となった文に対し $Y, Z$ に適当な語句を補うことができるかどうかを尋ね、その難易度を評定してもらった。 $X$ の変域は以下の通りであった:

- (8) a. お金, 三千元 (『お金』クラス)  
 b. 時間, 三日 (『時間』クラス)  
 c. 暇 (『時間』クラス?)  
 d. 労力, 手間, 手間暇 (『労力』クラス)  
 e. 注意, 忍耐, 我慢, 能力, 人気, 資格 (『特別な能力』クラス)  
 f. 子供 (『子宝』クラス?)

例えば、(4b)の $X$ に「お金」を入れた文は $S_1 =$ 「 $Z$ が $Y$ にお金をかける」で、この文について、 $Y, Z$ に適当な語句を補う課題が(i)簡単にできる場合には“2”を、(ii)なかなかできないが不可能ではない場合には“1”を、(iii)できないと思う場合には“0”を評定値として与えるように依頼した。

例えば、 $S_1$ の場合、 $Z =$ 「彼」、 $Y =$ 「事態の解決」を補い、「彼が事態の解決にお金をかける」を得るのが容易だと判断した人は2を評価値として与えることになる。

もし無条件に『時間はお金である』ならば、(4)–(7)の全部の例で、 $X$ が『お金』クラスであることを認可する表現は例外なく、 $X$ が『時間』クラスであることを認可するはずである。これは概念メタファー『時間はお金である』の十分条件の満足である。

以下に見るように、明らかに概念メタファー写像理論の予測は成立していない。

## 2.2 比喩写像の実態: 醜い現実

以上の調査の結果を図1に示した通りである。明らかに、言語使用の現実には概念メタファー理論が予想するよりも複雑であり、「醜い」が、言語の本質を露呈しており、興味深い。

結果は§2.6以降で詳しく検討するが、その“解釈”に関して、重要な点に関して二つ注意を促しておこう。第一のものは、認知言語学一般の支持者に対しての全般的な注意で、§2.3で取り上げる。第二のものは概念メタファー理論の支持者に対しての特定の注意で、§2.5で取りあげる。

n=13 Xの値	金		時間		労力				特別な能力?						子宝?	
	お金	三万円	時間	三日	労力	手間	暇	手間暇	注意	忍耐	我慢	能力	人気	資格	子供	子供を三人
Yに__(が)かかる	2.0	2.0	2.0	2.0	1.6	1.8	0.3	1.7	0.3	0.7	0.0	0.3	0.0	0.0	0.1	0.0
ZがYに__(を)かける	2.0	2.0	2.0	1.9	1.7	2.0	0.2	1.9	0.6	0.5	0.0	0.2	0.0	0.0	0.2	0.3
Yに__を払う	1.9	1.9	0.0	0.0	0.9	0.1	0.0	0.2	2.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.2
ZがYに__を支払う	1.9	2.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.1
ZがYに__をさく	0.7	0.8	2.0	1.8	1.1	0.8	0.8	0.6	0.5	0.2	0.0	0.2	0.1	0.0	0.1	0.1
ZがYに__を費やす	1.9	2.0	2.0	1.8	1.8	0.8	0.7	1.0	0.1	0.6	0.2	0.7	0.2	0.0	0.2	0.2
Zが__を儲ける	2.0	1.9	0.4	0.3	0.1	0.1	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	1.2	0.6
Zが__儲ける	0.2	2.0	0.1	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.9
Zが__をかせく	2.0	2.0	1.8	0.8	0.3	0.2	0.2	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.2	0.0	0.0
Zが__かせく	0.3	2.0	0.2	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0
Zが(Yで)__を得する	1.2	1.7	1.2	0.8	0.5	0.4	0.3	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0
Zが(Yで)__得する	0.1	2.0	0.1	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
(Zが)Y((する)に)は__が必要	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	1.7	1.1	1.5	2.0	2.0	2.0	2.0	1.5	1.8	1.5	0.5
(Zが)Y((する)に)は__が要る	1.8	1.8	1.8	1.3	1.8	1.3	1.0	1.3	1.9	1.9	1.7	1.8	1.6	2.0	1.2	0.6
(Zが)Y((する)に)は__を要する	1.7	1.9	1.9	1.8	1.9	1.5	1.0	1.5	1.8	1.9	1.7	1.6	1.2	1.8	0.8	0.5

図1 『時間はお金である』に関係する容認性のパターン(区間[0,2]の平均値)[2,2]を橙色で,[1,2]を黄色で,[0.1,1]を薄緑色で着色]

### 2.3 Clausner と Croft (1997) へのコメント

私の調査,並びに主張は,幾つかの面で先駆的な研究[12]に関連し,結果や主張の一部は類似しているが,無視できない大きな違いも存在する.これらについて簡単に論じておきたい.

#### 2.3.1 Clausner/Croft の基本的主張

Clausner と Croft が CMT の修正のために論じるのは次の(9a, b)の二点である:

(9) 概念メタファー  $M : S \rightarrow T$  の正しい記述のためには,

- 一般化が  $M$  の正しい生産性 (productivity) のレベルを記述する必要がある.それがなされない限り, CMT の記述力は過剰であり,説明力は不足している.
- 一般化が  $M$  の  $S, T$  のいずれについても正しい特定性 (specificity) のレベル (=スキーマ性のレベル) でなされる必要がある.それがなされない限り, CMT の記述力は過剰であり,説明力は不足している.

(9a) の点は,あらゆる概念メタファーが(主に生産性の観点で)同等にふるまうわけではなく,個々のメタファーが(主に生産性の観点で)異なる挙動をする理由が説明できる方が望ましいという動機に基づく.

(9b) の点は,あらゆる概念メタファーが(特に説明する現象の範囲の観点で)同等だというわけではなく,個々のメタファーが(主に記述力の観点で)異なる

網羅性,適応範囲をもつ理由が説明できる方が望ましいという動機に基づく.

CMT でも (9b) の点は十分とは言えないまでも—考察されていないことはない.だが,(9a) の点は, CMT で真剣に考慮されたことはない. CMT は記述力が過剰であり,記述的妥当性を満足するために定式化を制約し,記述力の過剰を押しこむ必要があるという問題意識に基づく修正案だという点で, Clausner と Croft の定式化は,彼らのメタファー研究に対する重要な貢献である.

Clausner と Croft の提案は, CMT 流のメタファーの定式化は大雑把すぎ,制約される必要があるということ認める点で,根源メタファー [23, 22] と同じであるが,解決の方向はまったく異なる.

#### 2.3.2 過剰一般化の証拠

(9a) と (9b) の二点は,認知言語学,あるいは概念メタファー理論に特有の,目新しい問題ではなく「古典的」な問題である.この点を理解するには,説明的妥当性と記述的妥当性とのあいだには,常に「あちらを立てれば,こちらが立たず」の葛藤的關係があることは理解しておく必要があるだろう.この二つの動機は,記述的妥当性と説明的妥当性の葛藤から生じ,例えば,(音韻)形態論の分野では「古典」的な問題である [25, 35].

例えば,(13) のような例に基づいて概念メタファーの定式化を

(10) 『TROUBLES IN LOVE RELATIONSHIP ARE TROUBLES IN A JOURNEY』

から

- (11) 『EVENTS IN LOVE RELATIONSHIP ARE  
EVENTS IN A JOURNEY』

へ、あるいは、より一般的に

- (12) 『LOVE IS A JOURNEY』 = 『(x IN) LOVE IS (x  
IN) A JOURNEY』

へと一般化すれば、扱える対象の範囲が (13) から (14) へ広がるので、見かけの説明力は向上する。

- (13) a. 彼らは今まで「山あり谷あり」だったけれど、何とか無事に結婚に漕ぎ着けた。  
b. 彼らは不倫の迷路に迷いこんだ。
- (14) a. 彼らは今日、新しい人生への {i. 門出; ii. 出発; iii. ?船出の日} を迎える。
- (15) a. ?\*彼らは今まで何度か雪崩に襲われたたけれど、何とか無事に生還した。  
b. ?\*彼らは愛の裏路地に迷いこんだ。

だが、これは単に見かけの効果であり、実際には過剰般化により実質的な説明力が低下している。例えば (15) は 『JOURNEY』 の領域では意味をなすが、『LOVE』 の領域では意味をなさない過剰般化である。Clausner と Croft は (9b) のような制約を設けることで、この過剰般化の問題を解決しようとしている。私は彼らが基本的に正しい洞察をもっていると考える。

認知言語学に較べると生成言語学ではよく理解されていることだが、記述のための規則を一般化し<sup>1)</sup>、記述できる範囲を広げることによる「見かけ」の説明力の向上は、(潜在的) 過剰生成による記述力の低下を招く。これは生成言語学の文献では「過剰生成」の(抑制)の問題として、繰り返し現われる主題である。生成言語学者は、記述モデルをうまく制約することが、この問題により解決を与えると信じる。これは問題意識としては正しく、同じことを認知言語学者が試みていけない道理はない。

### 2.3.3 過剰般化を解消する二つの方法

過剰般化の問題への解決法には、概略して二種類ある:

<sup>1)</sup> 概念メタファー 『T IS S』 は一般的な意味での意味記述のための「規則」の一種だという点を忘れてはならない。この点は、生成文法の(変形)規則と本質的には何も変わらない。

- (16) a. 記述モデルの弱体化: 過剰生成を許さないように記述モデル  $M$  の般化能力を制限する方法  
b. 監督的「メタ」モデルの導入: 過剰般化を許した上で、過剰な記述のみをうまく「濾過」する原理 (= メタモデル) を記述モデル  $M$  に追加する方法

Bybee [7, 8] と Langacker [33, 34] の枠組みを引きあいに出しながら Clausner と Croft が提唱している制約の枠組みは (16a) の一例である。

これに対し、先領域の覆し (Target Domain Overrides: TDO) [28] は (16b) の一例である。TDO は例えば GB 理論 [9]、あるいは「原理とパラメータ」の理論 [11] (以後、PP モデル)<sup>2)</sup> で生成言語学者が追求した説明の可能性と同じ方略である。認知言語学者の中に、TDO が例えば格フィルター (Case Filter) と同じ原理で過剰般化を退けるように働いているという事実に気づいている人は、どれくらいいるのだろうか?

だが、CMT と PP モデルとの間には大きな違いもある。PP モデルでは幾つかの原理 (例えば格フィルター) が定式化されているが、TDO は一般的な名称として存在するだけで、それには記述的「実質」はない。従って、メタファー写像に TDO を追加した不変性原理を遵守する形での概念メタファーを説明理論として評価すれば、その内実 は明らかに PP モデル以下である。

PP モデルだろうと、概念メタファーの理論妥当と、(16b) の説明をされても、それは私には説明に聞えない。それは単に記述のレベルを抽象化しただけである。メタモデルが体现する制約の体系に関して、私は「なぜそのような制約が存在するのか」と問いたくなる。このような疑問に対する統語論の領域での答えは明確である: 「それは、そういう(普遍文法と呼ばれる)体系が生得的だから」というものである。私には、この説明は、寝ぼけているとか思えない。

概念メタファー理論が先領域の覆しが存在する理由を説明しようとしたという話は私はまだ聞いたことはないが、それが仮になされたとしても、おそらく内実のない身体性基盤主義/経験基盤主義 (新た

<sup>2)</sup> 参考として、[10] も参照。

なメタモデル)を盾に取るかぐらいしかすることは  
ないであろう。

#### 2.4 Clausner-Croft モデルの含意

[12]には興味深い含意がある。Clausner と Croft  
の「形態論のスキーマ (= 規則) の体系性, 生産性  
がメタファーのスキーマの体系性, 生産性を説明す  
る」という重要な主張が正しければ, 次のことが予  
測される:

- (17) a. 形態論のスキーマが音韻素性で表現でき  
る<sup>3)</sup>ように, メタファーのスキーマは意  
味素性で表現できる。
- b. 形態論のスキーマ階層 (schema hierar-  
chy) が音韻素性の共起制限の体系とし  
て表現できるように, メタファーのスキ  
ーマ階層は意味素性の共起制限の体系  
として表現できる。

これは私が FOCAL という名で追求している研究の  
枠組み [66, 69] の支援となる。

##### 2.4.1 生産性はスキーマ性 (のみ) によって説明で きるほど単純ではない

私の調査, 並びに主張は, 幾つかの面で先駆的な  
研究 [12] に関連し, 一部は類似している。だが, 大  
きな違いも存在する。

まず, 私は各種のメタファーの生産性 (productiv-  
ity) の違いを何らかの原理で「説明」できるという  
主張は行わない。更に, 私は生産性の問題を直接  
にスキーマ性 (schematicity) の問題とは結びつけな  
い。実際, 生産性の概念はそれ自体, 複雑であり,  
生産性と使用頻度との関係も明らかではない (この  
点に関しては, 例えば [25] や [35] に収録された諸  
論文や [4] の議論を参照)。実際, 生産性を能力基  
盤で説明するか, 用法基盤で説明するかは, 大きな  
理論的な違いを生じる。このような根本問題が未解  
決であるため, 生産性という概念事態がうまく定義  
できていない状況でメタファーの生産性の説明を行

<sup>3)</sup> Clausner と Croft の形態論の概念に関して, 一つだけ  
補足しておく: 彼らが形態論と言うとき, 彼らは音韻  
次元のこのみを話題にし, 意味次元のことは無視し  
ているが, これは実を言うと正しくない。例えば, con-  
scious/consciousness vs. glorious/\*gloriousness (cf. glory)  
のような疎外 (blocking) [3] は, おそらく意味次元に原因  
のある現象である。このような例がある以上, 形態論は音  
韻素性の組織化の体系に還元できると見なすわけにはゆ  
かない。

うことは, 私には特に意味のあることだとは思われ  
ない。

確かにスキーマ性は重要な特徴で, 私が [68, 69]  
で提唱し, §4.2 で素描する潜伏性の上位スキーマ  
(化) 媒介モデルでも重要な役割を演じるが, 私が見  
る限り, スキーマのネットワークは事実に正しい記  
述を与えるだけであり, それを説明するものではな  
い。実際, 生産性はスキーマ性に頻度をカケあわせ  
ることで説明できるほど単純な現象ではない。

ただ, あまりスキーマ性に帰着することの否定的  
な面を強調してもつまらないので, もう少し積極的  
なことを言うておくと, Clausner と Croft が彼らのメ  
タファーの分類の際に利用しているスキーマ性の違  
いは意味フレーム基盤の記述 [14, 15, 63, 69, 64] を  
与えることで実証性が増すと考えられる。この際に  
重要なのは, 元領域から先領域に利用される概念は  
元領域のフレームに特有の意味役割だと限定しうる  
という知見である。このモデル化の方向は [64] で  
詳しく追求されている。

Clausner と Croft はメタファー (的表現) を, その  
生産性の程度の違いに基づいて次の三つのタイプに  
わけた:

- (18) a. 生産的な慣習的メタファー (conventional  
metaphors)
- b. メタファーに基づく半生産的な透明な状  
況表現 (metaphorically motivated trans-  
parent idioms)
- c. 非生産的な不透明な常套表現 (opaque  
idioms)

彼らはこれら三つタイプが (18a) と (18c) を両極  
とする「連続体」をなしていると主張している。そ  
れに続いて彼らは, 生産性をスキーマ性に結びつ  
け, このようなメタファーの連続体の存在を Bybee  
の仕事 [7, 8] や Langacker の仕事 [33, 34] から得ら  
れる (動的) ネットワークモデル ((dynamic) network  
model) の知見で「説明」しようとして試みているよ  
うに見受けられるが, これに完全に成功しているとは  
思われない。

彼らが成功しているかいないかに関係なく, こ  
の種の「説明」は, 私が試みることではない。メタ  
ファーには幾つかの異なるタイプがあり, それらに  
生産性の違いが伴うのは事実であるが, それが例え

ば (18a) と (18c) を両極にするような形で連続体をなしているという主張にどれほどの内実があるのか、私は非常に疑わしいと思う。

#### 2.4.2 連続体に潜伏する循環論を避ける必要

私は認知言語学で非常に頻繁に見受けられる説明の「流儀」である安易な「連続体」の名の下で行われる説明のほとんどに実効がないと考える。この論拠は、[58] に示したが、要点を簡単に言うと、次のようになる:

- (19) 言語表現の用法空間は多次元的 (multidimensional) であり、生産性、スキーマ性、透明性などは、その空間の次元の例にすぎない。

このことを念頭に置くと、Clausner と Croft の説明の問題点が明らかになる。例えば、Clausner と Croft の説明では、(不)透明性が何によって生じるのか説明されていない。不透明性を生産性によって説明する(か、その逆に、(非)生産性を(不)透明で説明する)のか、あるいは、(不)透明性を(非)スキーマ性によって説明する(か、その逆に、(非)スキーマ性を(不)透明で説明する)のか、あるいは、(非)スキーマ性を(不)透明性によって説明する(か、その逆に、(不)透明を(非)スキーマ性で説明する)のか、などの数々の自明でない問題が残っている。つまり、彼らは、スキーマ性、生産性、透明性のような特徴のうち、どれが基本的な特徴で、どれが派生的な特徴なのか自明ではないのに、それが自明であるかのようにモデル化し、そのモデルによって説明を行っている。従って、生産性の程度の違いをスキーマ性や透明性の度合いの違いによると説明するのは、明らかに循環論である。この意味で、Clausner-Croft の「説明」は論点先取で、Bybee/Langacker のネットワークモデルに依拠して彼らの与える生産性の違いの「説明」は、[58] の指摘する「程度の問題症候群」を呈するもので、説明とは言えないものである。

Clausner と Croft は生産的なメタファーと非生産的なメタファーがあることを認識した。これは正しい。だが、それが一次元的な連続体をなしているかどうかは、経験的に明らかではないし、おそらく一次元化は過度の単純化で、誤りであるか、そうでないとしても、現実を反映しないモデル化であろう。実際、多次元的複雑性を一次元化して「説明」したと称する愚は、「程度の問題」症候群の患者が示す

症状の基本パターンである。

#### 2.4.3 ネットワークモデルは言語の何を説明するのか?

もう少し突っこんだ議論をすると、Clausner と Croft の規定するメタファーの生産性の連続体が妥当に見えるのは、Bybee/Langacker のネットワークモデルの威光のお陰である。従って、決して様々なメタファーの生産性の違いの説明ではない。それはそのような違いの「解釈」に過ぎない。

Clausner と Croft の説明が、解釈でしかないと私が言う正確な意味は、それが認知言語学の通例通り、メタファーの生産性がどんな因子によって決まる(量な)のか、明示的に関数の形で特定しない(つまりモデル化しない)からである。一般に、特徴  $P$  の程度の差の説明に望まれるのは、任意の言語表現  $e$  について、その特徴の強さ  $P(e)$  が (20) として、 $e$  の特徴  $X(e) = \{x_1(e), \dots, x_n(e)\}$  の関数として明示されることである。実際、特徴  $P$  の程度の差の説明は、このような明示化を伴わない限り、説明とは呼べない。

$$(20) P(e) = f(x_1, \dots, x_n)$$

ただし、 $x_i(e)$  は(透明性やスキーマ性のような)因子特徴だとする。

(20) のような明示化を伴わない Clausner と Croft 流の「説明」は、Bybee と Langacker のネットワークモデルの信憑性に準拠してメタファーの生産性の違いに対し「ありそうな解釈」を与えるが、それ以上のもではない。確かに、Bybee と Langacker のネットワークモデルは、並列分散処理 (PDP) [13, 46, 37] の枠組みとの整合性は高いと期待されるが、その整合性が用語法上のもではなく、モデルの信憑性が認知言語学の外部でどれほど評価されるかは、まったく別の問題である。

強調するが、メタファーが生産性の違いによって一次元的な連続体が存在するというのは、事実ではない。数学的にはどんな恣意的な特徴だって、適切に一次元化できることは忘れてはならない。事実として存在するのは、生産性の程度の差の体系であって、それが一次元的な連続体をなしているかどうか—より正確には、それが説明になっているかどうか—は、記述者の記述モデル、あるいは「理論」という形の思いこみによって決まる。

#### 2.4.4 スキーマ性と生産性の関係

以上の議論から含意される重要な点を、最後に一つ強調しておきたい。

Clausner と Croft の (暗黙の) 主張とは裏腹に、メタファーの生産性 (の違い) はそのスキーマ性 (の違い) との間に単純な相関関係はない。言語表現  $e$  の生産性の違いが多次元的であるとすれば、 $e$  に伴う (概念的) スキーマ性は、その生産性に関与する幾つかの次元  $\{x_1(e), \dots, x_n(e)\}$  の一つであるに過ぎない。これ故、スキーマ性が高いものが生産的な慣習的メタファーで、スキーマ性が低いものが非生産的な不透明な常套表現だという彼らの素描は過度の単純化であり、明らかに現実を反映していない。実際、頻度を考えると、常套表現と慣習メタファー表現のどちらが相対頻度が高いということは、事実として知られていない。従って、スキーマ性と生産性の関係について妥当な一般化を得ようとするなら、それらはまず、独立に記述される必要がある。

#### 2.4.5 用法基盤のメタファー研究の必要性

結局、メタファー生産性を正しく理解し、説明しようとするれば、用法基盤の分析 (usage-based analysis) にその基礎を求めなければならない。直観だけでは、どうにもならない。用法基盤主義の基本はコーパス分析だが、Clausner と Croft が、この意味で頻度も考慮に入れたコーパス基盤のメタファーの生産性の分析をしたとは考えられない。

用法基盤主義を貫くメタファー研究はまだ存在しないようだが、メタファーのタイプをタグづけしたコーパスが準備されることで、将来的には盛んになるだろう。もちろん、Clausner と Croft の三つのタイプの区別は、そのための基礎研究として見れば、非常に有意義である。

### 2.5 メタファーの「能力と運用」は別???

ここで話を戻して、概念メタファー理論の支持者へ注意を促しておく。

現実の醜悪さを無視するために、理論の予測と現実との乖離をメタファーの能力 (metaphoric competence) とメタファーの運用 (metaphoric performance) と区別をもちだして、理想化を行ない、その違いで「説明」することは可能である。だが、Lakoff 学派の研究者が本気でそれを試みるならば、Chomsky 流生成言語学への叛旗は感情的反発の名

目にすぎなかったことになる。

だが、残念ながら、Lakoff [28, pp. 218–219] が次のように言って心理系の (反証) 実験へ釘刺し的に対応しているのは、実はメタファーの「能力と運用」の区別をもちだしているのと事実上は変わらないものである:

- (21) It is important to recall that **metaphorical mappings are fixed correspondences that can be activated, rather than algorithmic process that take inputs and give outputs**. Thus, it is *not* the case that sentence containing conventional metaphors are the product of a real-time process of conversion from literal to metaphorical readings. (p. 218) [筆者による太字での強調]

ここ、並びにこれに続く論で、Lakoff は実時間処理 (real-time processing) と逐次処理 (sequential) を同一視している。ここで彼が「アルゴリズムのある」 (algorithmic) と言っているのは、事実上は逐次処理のことなのだが、ここではそれはわからない。もう少し先、この節の最後になると、この点がようやく明らかになる:

- (22) Simultaneous mappings are very common in poetry. [...] This is possible since **mappings are fixed correspondences**.

There is an important lesson to be learned from this example. In mathematics, mappings are static correspondences. In computer science, it is common to represent mathematical mappings by algorithmic processes that take place in real time. Researchers in information processing psychology and cognitive science also commonly represent mappings are real-time algorithmic procedures. **Some researchers form these fields have mistakenly supposed that the metaphorical mappings we are discussing should also be represented as real-time, sequential algorithmic procedures, where the input to each metaphor is a literal meaning**. Any attempt to do this will fail for the simultaneous mapping cases just discussed. (p. 219) [筆者による太字での強調]

Lakoff は概念メタファー写像が「固定された対応づけ」 (fixed correspondences) である考えに固執し、その結果、これが実時間で計算されていないことを強調する。この際、彼は実時間の並列処理 (例えば並列分散処理 (Parallel Distributed Processing: PDP) [46, 37] のことなどまったく念頭に置いてい

ない。競合的並列処理が可能であるならば、対応づけが固定されている必要はまったくない。

私たちがこの文章から得る教訓の一つは、Lakoff という認知言語学の大御所が当時の認知科学の事情に関して、相当無知だった(か、少なくともその理解が表層的、表面的で、「たくさんあるノードを結合すればコネクショニズムだ」タイプの、脳内処理の並列性、分散性の本質を理解していないものだった)ということだ<sup>4)</sup>。

確かに、比喩の解釈が「まず字義通りの解釈を求め、それに失敗したら、比喩的な解釈を求める」という処理の順番をもっていないという指摘は正しい。だが、字義通りの解釈を求める処理 P[+literal] と非字義通りの解釈を求める処理 P[-literal] が分散的に、同時に並列して起こっていて、「非比喩的な文の解釈では P[+literal] が勝ち、比喩的な文の解釈では P[-literal] が勝つ」という“勝者が全部を取る”(Winner-Take-All: WTA) 形の並列アルゴリズム (parallel algorithms) が存在しないという可能性は否定されないし、実際にそういう並列処理が起こっているのは、神経心理学の知見からほぼ確実である。特に処理の分散性が意味することは、Lakoff の考察からすっかり抜け落ちている。Lakoff は本当にこれを知らなかったのか?<sup>5)</sup>

P[+literal], P[-literal] に関して一言だけ注意しておく、P[+literal], P[-literal] は処理プロセスとして自律的であればよく、P[+literal], P[-literal] を「専業」する処理部門が存在する必要はない。これが処理の分散性の本当の意味である<sup>6)</sup>。

<sup>4)</sup> Lakoff の [28] とほぼ同一の内容が [29] として出版されている事実、私はただただ驚愕する。これは並列分散処理の専門家たちを相手に「私は並列分散処理のことなど、何も知りません」と告白しているのに等しい、単なるアホ丸出しではないのか???

<sup>5)</sup> Lakoff は Cognitive Phonology (CP) [27] という形で並列処理的音韻論の枠組みを提唱し音韻論への重要な理論的貢献をなしている。だが、先ほどの引用で彼の比喩の処理に関する主張は—執筆時期がほとんど同じであるにも係わらず—実時間の並列処理の可能性は考慮に入れておらず、CP での卓見と真っ向から矛盾する。自説にとって都合の悪い事実は無視したということなのだろうか?—その理由は私にとっては、本当に謎である。

<sup>6)</sup> ただし、P[+literal], P[-literal] の処理の途中に干渉的な相互作用があることは不自然かも知れない。実際、これは P[+literal], P[-literal] の処理自律性の仮定を弱める可能性がある。だが、いずいせよ、二つの処理結果のあいだの「勝ち負け」が決まることのみが重要で、処理の途中の干渉的相互作用があることは不問にしてよい事柄である

心理学者、認知科学者たちが「比喩の理解が実時間のオンライン処理だ」と主張する場合、それが無前提に逐次処理だという想定などおいてなどいないはずだ。少なくとも、60年代、70年代の認知心理学者、認知科学者ならいざ知らず、90年代の認知心理学者、認知科学者がそんな時代遅れの想定をし続けているとは考えにくい。従って、先ほどの引用箇所での Lakoff の比喩の心理学研究に対する批判は、明らかに藁人形相手の攻撃である。

### 2.5.1 CMT は反証を受け入れない

この事態の変化を知らず、Lakoff は実時間のオンライン処理と逐次処理を同一視し、それがオンライン処理の「唯一の解釈」などではないことを理解してない。彼の認知心理学、認知科学の理解は、相当控え目に言ったとしても時代遅れである。これが Lakoff が Glucksberg らの(反証)実験 [20], Murphy の批判 [39, 40] の意味を理解していない最大の理由なのであろう。

Lakoff が先ほどの引用の結論部で述べていることは、従って、半分正しく、半分誤りである。逐次的アルゴリズムでは同時写像をうまく記述できないというのは正しい主張である。だが、同時写像が固定された対応関係によってしか扱えない、実時間処理に現われない現象である主張は、単に無知に基づく誤りである。並列処理はそれを簡単に実現し、同時写像が複数の並列する処理の副産物で「見かけの効果」になる可能性は単に十分にあるだけでなく、脳内の比喩の処理は確実にその可能性通りになっていると考えてよいだろう。従って、Lakoff が主張する比喩理解は実時間処理ではないとする根拠は、控え目に言っても薄弱である。比喩理解は単に逐次処理でないことが言えるだけで、同じ理由でそれが実時間処理でないことが言えるわけではない。そんなことになったら、明らかに自己矛盾である。

### 2.5.2 自己矛盾の自覚の欠如

比喩の理解が実時間処理でないと主張をする際に採った立場に関して、Lakoff が自分の Chomsky 流生成文法への批判で採った立場とのあいだに自己矛盾を感じないなかったのか、私は非常に疑問に思う。実際、先ほどの引用で見た Lakoff の主張は、統語論には能力/運用の区別は認めないが、意味には



能力/運用の区別を認めると言っているのと実質的に同じことである。これが研究者の都合による、恣意でないわけがあるのか？ 私にはこのような手前ミソを許すような比喩の理論が言語の認知科学に貢献するとはまったく考えられない。それは単なる言語学者の暇つぶしか、戯言で終る可能性が大ではないのだろうか？

Lakoff 学派の下らない解釈への釘刺しはこれくらいにして、実際の分析に移ることにする。

## 2.6 メタファーの現実の複雑性の分析

図1の容認性のパターンが示唆するのは、以下の特徴である：

- (23) X が収入としての { お金, 時間 } を許容するが、収入としての { 労力 } を許容せず、[[ 時間はお金である ]] を支持し、[[ 時間は労力である ]] を支持しないタイプ：
- 彼はそのおかげで三百万を稼いだ。
  - 彼はそのおかげで一週間を稼いだ。
  - \*彼はそのおかげで手間を稼いだ。
- (24) X が支出としての { お金, 時間, 労力 } をどれも許容し、お金を目的語に取る用法が本用法で、[[ 時間はお金である ]] を示唆するタイプ：
- 彼はその事業 (の完成) に三千万 (を) 費やした。
  - 彼はその事業 (の完成) に三年 (を) 費やした。
  - 彼はその事業 (の完成) に手間暇 (を) 費やした。
- (25) X が支出としての { お金, 時間, 労力 } をどれも許容し、{ { 時間はお金である }, [[ 労力はお金である ]] } ばかりでなく、{ [[ お金は労力である ], [[ 時間は労力である ]], { [[ お金は (抵) 抗力である ], [[ 時間は (抵) 抗力である ]]} も示唆するタイプ：
- 彼はその事業 (の完成) に三千万 (を) かけた。
  - 彼はその事業 (の完成) に三年 (を) かけた。
  - 彼はその事業 (の完成) に手間暇 (を) かけた。
- (26) X が { お金, 時間, 労力 } のすべてを許容するが、{ 時間 } が基本で、[[ 時間はお金である ]] の逆であ

る [[ お金は時間である ]] を支持するタイプ：

- 彼はそのために { お金; 二万円 } (を) さいた。
- 彼はそのために { 時間; 三日 } (を) さいた。
- 彼はそのために { 労力; 手間 } (を) さいた。

(27) X が支出としての { お金, 労力 } を許容するが、支出としての { 時間 } を許容せず、[[ 時間はお金である ]] か [[ 労力は時間である ]] を示唆するタイプ：

- 彼は家の修理にだいがお金を払った。
- \*彼は家の修理にだいが時間を払った。
- 彼は家の修理にだいが労力を払った。

(28) X が支出としての { お金 } を許容するが、支出としての { 時間, 労力 } を許容せず、[[ 時間はお金である ]] を支持しないタイプ：

- 彼はその事件 (の解決) に三千万 (を) 支払った。
- \*彼はその事件 (の解決) に三年 (を) 支払った。
- \*彼はその事件 (の解決) に労力 (を) 支払った。

(29) X が省力化としての { 労力, 時間, お金 } を許容するが、{ お金 } は収入で読まれ、[[ 時間は省かれた労力である ]] ([[ TIME IS SAVED EFFORT ]]) と [[ お金は省かれた労力である ]] ([[ MONEY IS SAVED EFFORT ]]) を示唆し、[[ 時間はお金である ]] を支持しないタイプ：

- ??彼はそのおかげで三百万を省けた。
- a' 彼はそのおかげで三百万の出費を省けた。
- b. ?彼はそのおかげで一ヶ月を省けた。
- c. 彼はそのおかげで手間を省けた。

これらの一部—特に (23) と (25)—は確かに [[ 時間はお金である ]] を支持するが、事態はそれほど単純ではない。

### 2.6.1 実態を説明するより妥当な説明

[[ TIME IS MONEY ]] の妥当な説明は次の点を説明できる必要がある：

(30) (27) で挙げた <Z が Y に X を払う> の容認性のパターン, (28) で挙げた <Z が Y に X を

支払う)の容認性のパターンは明らかに『時間はお金である』の反証となっている。弱いながらも、〈YがXを儲ける〉の容認性のパターンも同様。

- (31) 収入としての『お金』と支出としての『お金』は明らかに別のものである。
- (32) (26)が示すように〈XがYにXをさく〉はXが時間クラスであることが本用法であり、『お金は時間である』(『MONEY IS TIME』)という概念メタファーが存在すると考えないと説明に一貫性がない
- (33) 支出としての『お金』と『時間』は『労力』の下位クラスだが、収入としての『お金』と『時間』は『労力』の下位クラスではない。
- (34) (27)の対比を説明するには、『労力はお金である』という概念メタファーを考え、それから『時間は労力である』を経由して、『時間はお金である』が派生したと考えた方がいい。
- (35) 容認性のパターンから見て、(7)のタイプは他の関係がないと見ていい。だが、(7)のタイプの語の意味は明らかに資源性にかかわっている。これは資源性による説明にとっては矛盾となる事実である。
- (36) “注意を払う”が言えて、“{お金; 時間; 労力}を払う”が言えるのだから、『注意はお金である』と『注意は労力である』である概念メタファーの存在が示唆されるが、『注意は労力である』はともかく、『注意はお金である』は明らかに不自然である。
- (37) (27)の“払う”のデータが示しているのが、『お金は労力である』なのか、『お金は労力である』なのか、決め手に欠ける。そのいずれにしても、それが概念メタファーなのか、下位クラス化なのか見極めづらい。『お金は労力である』は『お金の出費は労力である』だと見なせば、これは下位クラス化であろう。

### 2.6.2 形態論は意地悪である

概念メタファー認定の際には形態論的不規則性の問題も考慮に入れる必要があり、“n人がかり”、“n日がかかり”のような熟語的表現の存在を無条件に概

念メタファー『TIME IS MONEY』の証拠と見なすことは無理がある。例えば、(38a)が言えることは、(38b)が言えることを意味しない。

- (38) a. 彼らは強敵を三人がかかりで倒した。  
b. ?\*彼らは強敵を倒すのに、三人(を)かけた。
- (39) a. 彼は一週間がかかりでその難問を解いた。  
b. 彼らはその難問を解くのに、一週間(を)かけた。
- (40) a. ?\*彼は百万がかかりでその困難な事態を切り抜けた。  
b. 彼はその困難な事態を切り抜けるのに、百万(を)かけた。

(39a)を『時間はお金である』の証拠と見るなら、同じ論理によって?\*『人材はお金である』の証拠と見なければならぬ。だが、これは明らかに寛容すぎる。実際、(40a)は逸脱した表現である。

観点を変えると、(38)–(40)が示しているのは、〈ZがYにXをかける〉、〈ZがXがかかりでYする〉ではXの資源性が前提となっているという特徴に見える。従って、(38a)は『人材は資源である』、(39a)は『時間は資源である』の証拠と見ることはできる。だが、これは明らかに寛容すぎる。(40a)の逸脱性は、『時間は資源である』の予測と矛盾する。(38a)が可能であることは何の概念メタファーの証拠になっていないことを意味する。

### 2.7 拡張された語の用法は何を意味しているのか?

ここで次のように問題を見直してみることは、おそらく有益であろう:

- (41) (1)のような拡張的な用法 — この場合、例は英語であるけれども — が存在することは、それ自体として概念体系に関して、いったい何を意味しているのか?

拡張された用法の説明の際に、概念メタファーはどれぐらいの“寄与度”をもつものなのだろうか? 100%でないのは自明であるとして、70%? 50%? 30%? — それは測定してみないと、わからない。

もう少し具体的に言うと、

- (42) 概念メタファーは(1)にあるような事例の詳細を十分にうまく説明できるほど強力な説明

モデルなのだろうか?

- (43) (1) のような用法の説明の際の概念メタファーによる説明の寄与率が、仮に 50 %程度だとして、この現象を説明するのに概念メタファーの存在は必要不可欠なのだろうか?

この段階では決着をつけられないが、以上の考察から少なくとも今の段階で明らかなのは「資源とは何か?」という問題に決着をつける必要があるということである。次の節ではこの問題に取り組むことにする。

### 3 概念メタファー [[ 時間は資源である ]] の妥当性の検証

#### 3.1 資源メタファーの実態

この節では、Lakoff と Johnson [31, pp. 161–169] で論じられている資源メタファー (resource metaphor) と、そのメタファーの元領域を定義する資源スキーマ (resource schema) の妥当性を検証する。結果を先取りすると、Lakoff と Johnson の資源スキーマの設定は杜撰すぎ、言語データの詳細な分析とは相容れないということである。

##### 3.1.1 調査内容

以下の手順で、[[ TIME IS MONEY ]] と同様に共起調査を行なった。これは概念メタファー発見のための明示的な手法を定義する。

(44) にある 37 個の語句を (45) にある 29 個の表現の X に入れた際、Y, Z に適当な名詞句 (Z = “彼”, Y = “問題の解決”) を補って難なく文を作ることができる場合には “2” を、苦勞する場合には “1” を、どうやってもできない場合には “0” をセルに評価値として記入するように求めた。

(44) 資源性調査項目:

1. お金, 2. 資金, 3. 三万円, 4. 時間, 5. 電気, 6. 水道, 7. 交通, 8. 交際, 9. 労力, 10. 石油, 11. 努力, 12. 金 (かね), 13. 財産, 14. 情熱, 15. 食べ物, 16. 子供, 17. 飲み物, 18. 忍耐, 19. 手間, 20. 交友関係, 21. 暇, 22. 手間暇, 23. 人気, 24. 三日, 25. 資格, 26. 労働, 27. ムダ, 28. 人材, 29. 友人, 30. チャンス, 31. 能力, 32. 十二人, 33. 希望, 34. 愛情, 35. 資源, 36. 森林, 37. 野生動物

(45) 資源性調査環境:

1. Y が X をおしむ; 2. Y が X 代をおしむ; 3. Y が X 費をおしむ; 4. Y が X を儉約する; 5. Y が X 代を儉約する; 6. Y が X 費を儉約する; 7. Y が X を節約する; 8. Y が X 代を節約する; 9. Y が X 費を節約する; 10. Y が (Z のための) X を失う; 11. Y が (Z に) X をかける; 12. Y が (Z に) X を費やす; 13. Y が X を守る; 14. Y が (Z に) X を投資する; 15. Y が X を保つ; 16. Y が X を残しておく; 17. Y が (Z に) X を投じる; 18. Y が X を消費する; 19. Y が (Z に) X を使う; 20. Y が X を維持する; 21. Y が (Z に) X を使いすぎる; 22. Y が X を保存する; 23. (Z のための) X が枯れる; 24. (Z のための) X がなくなる; 25. (Z のための) X が残り少ない; 26. (Z のための) X が失われる; 27. (Z のための) X が切れる; 28. (Z のための) X が不足する; 29. (Z のための) X が枯渇する;

##### 3.1.2 調査結果

図 2 に資源性の高い概念を表わしやすい名詞を挙げる。図では左から右へ、資源性の高い概念を表わしやすい名詞が並ぶように配置した。

ただ、この図は [[ 資源 ]] 概念の内容に関して有意義な情報を提供しており、それなりにヒントになるが、これを見ても、[[ 資源 ]] 概念が何であるかは、実はあまりよくわからない。その理由は二つある。

- (46) 「資源」という語が [[ 資源 ]] 概念を表わしているとは限らない。語としての「資源」はそれ自体が多義的で、語に表わされている概念は、少なからず曖昧である。
- (47) このため、[[ 資源 ]] 概念の実体は分散的なもので、素性のようなものを使ってのみ表示しようと考えるてはならない。すなわち、概念を原子的取り扱う方法は (できなりよりマシな程度の) かなり粗っぽい近似でしかない。
- (48) 従って、[[ 資源 ]] と表記して [[ 資源 ]] 概念を「表わした」とするのは、単なるまやかしである。同じ意味で [[ TIME IS MONEY ]] あるいは [[ 時間は (お) 金である ]] と表記して、これが概念メタファーを表わしたとするのは (できなりよりマシな程度の) かなり粗っぽい近似

n=8	資金	資源	石油	お金	金	時間	財産	電気	食べ物	飲み物	人材	三万円	情熱	森林	労力	能力	チャンス
{節約する,消費する,維持する,残り少ない,なくなる,枯渇する}の平均	1.93	1.91	1.7	1.63	1.57	1.55	1.46	1.36	1.32	1.23	1.21	1.14	1.07	1.05	0.98	0.98	0.98
Yが__を守る	1.63	1.88	1.5	1.88	1.63	1.75	2	0.75	1.75	1.63	1.25	1.5	0.5	2	0.13	0.63	0.75
Yが__を保存する	1.13	1.63	1.38	1	0.25	0.25	1.25	0.25	1.75	1.75	0.25	0.63	0.25	1.88	0.13	0.13	0
Yが__を残しておく	2	1.88	1.75	2	2	1.88	2	0.63	2	2	1.63	2	0.63	2	1.25	0.63	1.38
Yが__を保つ	1.25	1.5	0.88	0.63	0.63	1	1.5	0.75	0.63	0.38	1	0.75	1.75	1.25	0.75	1.13	0.38
Yが__を節約する	1.75	1.75	1.63	2	2	2	1.13	1.88	1.38	1.25	0.63	1.88	0.13	0.63	1.75	0.25	0.25
Yが__を消費する	1.75	2	2	1.75	1.5	1.75	1.38	2	1.13	1	0.75	1.5	0.25	0.38	1.38	0.63	0.63
Yが__を儉約する	1.5	1.25	1.5	2	1.75	1.13	0.38	1.13	0.38	0.25	0.13	1.5	0.13	0	0.5	0.25	0
Yが__をおしむ	1.63	1.5	1.38	2	2	2	1.25	1	1.63	1.43	1.25	1.63	1	0.75	2	1.38	0.88
Yが__を維持する	2	1.75	1	1	0.88	0.63	1.75	0.75	0.38	0.25	0.88	0.88	2	1.63	0.63	1.75	1.13
Yが(Zのための)__を失う	2	1.75	1.38	2	2	2	2	0.75	1.5	1.5	2	1.88	2	1.25	0.88	1.75	2
Yが(Zに)__を投じる	2	1.13	0.88	1.75	1.75	1.38	1.75	0.5	0.13	0.13	1.5	2	1.13	0.13	1.63	0.5	0.5
Yが(Zに)__を投資する	1.38	0.63	1	1.75	1.75	1.13	1.75	0.13	0.38	0.25	1.5	1.75	0.25	0	0.63	0.25	0.38
Yが(Zに)__を使う	1.5	1.88	1.63	2	1.88	2	2	1.5	0.88	0.88	1.38	2	0.25	0.88	1.75	1.63	1
Yが(Zに)__を使いすぎる	1.88	1.75	1.88	2	1.75	2	1.88	1.88	0.38	0.13	1.25	0.25	0.5	0.63	1.88	1.25	0.63
Yが(Zに)__を費やす	1.5	1.5	1.25	1.88	2	2	2	0.88	0.63	0.5	0.38	2	2	0.13	1.5	0.88	0.38
Yが(Zに)__をかける	0.75	0.5	0.38	2	2	2	0.88	0.25	0.13	0.13	0.63	1.75	1.88	0	1.75	0.38	1.13
(Zのための)__が不足する	2	1.88	1.75	2	1.88	2	0.63	1.63	2	2	1.88	1	1.88	1.13	1.25	1.13	0.63
(Zのための)__が残り少ない	2	2	1.75	1.88	2	2	1.75	1.5	1.75	1.75	1.38	0.38	0.38	1.5	0.63	0.25	1.63
(Zのための)__がなくなる	2	2	1.75	2	2	2	2	1.13	1.88	1.75	1.5	2	2	1.63	1	1.75	2
(Zのための)__が枯渇する	2	2	2	0.75	0.75	0.5	1.63	0.63	0.75	0.63	1.5	0.38	0.88	0.5	0.25	1.13	0.63
(Zのための)__が切れる	1.88	1.5	1.63	1.25	1.25	1.25	0.5	1.38	1.13	1.25	0.88	0.63	1.13	0	0.63	0	1.13
(Zのための)__が枯れる	1.38	1.75	1.75	0.5	0.25	0	0.75	0.38	0.38	0.5	1.13	0	1.88	1.5	0.13	1.13	0.38
(Zのための)__が失われる	2	1.88	1.5	1.88	1.88	2	1.88	1	1.5	1.5	1.88	1.88	2	1.75	0.88	1.63	2

図2 名詞がコードする概念の資源性を基礎づける容認性のパターン(区間[0,2]の平均値)[2,2]を橙色で,[1,2]を黄色で,[0.1,1]を薄緑色で着色)

ではない。

まず資源という概念の曖昧性に関して説明しよう。

3.1.3 「資金」と「資源」の関係

「資源」という名詞の共起制限を「資源」概念と同一視できない証拠としては、例えば、「資源」と「資金」の動詞との共起パターンが非常によく似ているという事実がある。これは「資源」概念と「資金」概念とが同一ならば問題はないが、両者の中核は同一であって欲しくないという直観もある。だが、二つの概念の共起パターンの異なりが、二つの概念上の異なりを表わすのに十分なものかどうか、自明ではない。この事実の妥当な解釈は、実は「資源」という名詞は「資源」概念を表わすだけでなく、「資金」概念も表わしているというものである。同じ理由で、「資金」という名詞は「資金」概念を表わすだけでなく、「資源」概念も表わしていると考えられる。

資源と資金は分離できないわけではない。例えば、〈Yが(Zのために)Xを保存する〉では、「資金」の得点は低い、「資源」の得点は高い。これは「保存」が非金銭的なモノ性をコードしているからだと考えられる。反対に、金銭的な面が全面に出る〈Yが

(Zのために)Xを投資する〉、〈Yが(Zのために)Xを投じる〉では資金の得点が高い。このような違いにも係わらず、「資金」と「資源」のプロファイルは全体として非常に似ている。これは両立しない側面が脱曖昧化されない場合には、「資源」と「資金」二つの概念は区別できないということである。

この可能性がある以上、「資源」概念を「資源」という語の評価基準なしで選ばれた語の用法(e.g., (1))から求める方法は安易すぎる。だが、概念メタファー理論がやっていることは、まさにこれなのである。資源に限らないが、概念の特定には、恣意的に選ばれた語の用法の列挙からの読み取り以外に、全般的にもっと少し入念な手法が必要である。

3.1.4 資源性の高い概念群の特定

{資源, 資金}概念を中核とした意味空間を構成するために、私は次の手法を用いる。

(49)にある指標語彙(動詞)のXの位置への共起性の判断の得点(平均)を資源性の指標Rとする<sup>7)</sup>。

<sup>7)</sup> 指標Rの解釈に関して、次の点には注意が必要である。Rを用いた概念の資源性の特徴づけでは、資源性が一次元化されているが、これは便宜的なものであり、資源性が一次元で表わせるという主張を伴うものではない。Rは、あくまでも資源性を構成する幾つもの独立な次元{r1, r2, ..., rn} (=R)で構成される空間の仮想的な中心(つまり「資源」という語の縮める位置)からの距離を表わしているに

- (49) { i. Y が (Z のための) X を節約する; ii. Y が (Z のための) X を消費する; iii. Y が (Z のための) X を維持する; iv. (Z のための) X が不足する; v. (Z のための) X が残り少ない; vi. (Z のための) X がなくなる; vii. (Z のための) X が枯渇する }

この指標の下で、資源性の高いと思われる概念を表わしていると考えられる語は、以下の (50I) の概念クラス 1, (50II) の概念クラス 2, (50III) の概念クラス 3 のうち、クラス 1,2 だと考えられる:

- (50) I.  $1.5 \leq R \leq 2$  (6 語句, 16%):  
 資金 (1.93), 資源 (1.91), 石油 (1.70), お金 (1.63), 金 (1.57), 時間 (1.55),  
 II.  $1.0 \leq R < 1.5$  (8 語句, 21%, 累計 38%):  
 財産 (1.46), 電気 (1.36), 食べ物 (1.32), 飲み物 (1.23), 人材 (1.21), 三万円 (1.14), 情熱 (1.07), 森林 (1.05),  
 III.  $0.5 \leq R < 1.0$  (13 語句, 27%, 累計 73%):  
 労力 (0.98), 能力 (0.98), チャンス (0.98), 愛情 (0.95), 人気 (0.82), 水道 (0.63), 忍耐 (0.63), 希望 (0.57), 努力 (0.57), 資格 (0.57), 交友関係 (0.54), ムダ (0.52), 暇 (0.50),

(50III) は「水道」のように資源性に関係した語を含むとは言え、資源性が高い概念を表わした名詞群だとは見なし難い<sup>8)</sup>。(50I), (50II) は資源性が高い概念を表わした名詞群に該当するが、これらのうち、どれがカテゴリー化によるもので、どれが概念メタファーによるものなのかは明らかではない。この理由から、概念メタファー認定のための明示の手順を考案するのは必至である。以下ではそれを試みることにする。

すぎない。従って、この結果を、資源性という次元の次元が存在するという主張としては解釈しないで欲しい。多次元的な対象の誤った次元化による「連続体の存在」の主張は、認知言語学の研究に非常にありがちな傾向なので、それを助長する解釈の可能性には釘を刺しておく。

<sup>8)</sup> 「水道」の資源性が低いのは、別に意外なことではない。「(飲料)水」は資源だが、「(上)水道」は資源ではない。このことが容認性判断にしっかり反映されている。

### 3.2 資源性に係わるカテゴリー化 概念メタファーの特定

#### 3.2.1 (50I) の語群の分析からわかること

(50) にある 5 つの語を基にして、次の (下位) カテゴリー化、ないしは概念メタファーの候補が特定可能である:

- (51) a. 資源は資源である [[ RESOURCE IS A RESOURCE ]] (自明なカテゴリー化)  
 b. 非自明なカテゴリー化、ないしは概念メタファー

i. 資金は資源である [[ FUND IS A RESOURCE ]] (proper categorization)

ii. 石油は資源である [[ OIL IS A RESOURCE ]] (proper categorization)

iii. 金は資源である [[ MONEY IS A RESOURCE ]] (lazy, extended categorization?)

iv. 時間は資源である [[ TIME IS A RESOURCE ]] (lazy, extended categorization?)

- (52) a. 資金は資金である [[ FUND IS A FUND ]] (自明)

b. 非自明なカテゴリー化、ないしは概念メタファー

i. 資源は資金である [[ RESOURCE IS A FUND ]] (?)<sup>9)</sup>

ii. 石油は資金である [[ OIL IS A FUND ]] (?)

iii. 金は資金である [[ MONEY IS A FUND ]] (?)<sup>10)</sup>

iv. 時間は資金である [[ TIME IS A FUND ]] (conceptual metaphor?)

- (53) a. 金は金である [[ MONEY IS MONEY ]] (自明)

b. 非自明なカテゴリー化、ないしは概念メタファー

i. 資源は金である [[ RESOURCE IS

<sup>9)</sup> これは Lakoff らの言う [[ GENERIC IS SPECIFIC ]] メタファー [32, 26] の一例である。これが比喩ではない理由は、§4.2.1 で説明する。

<sup>10)</sup> これも [[ 資源は資産である ]] と同じく、[[ GENERIC IS SPECIFIC ]] メタファー [26, 28, 32] の一例である。これが比喩ではない理由は、§4.2.1 で説明する。

- MONEY ]] (?)
- ii. 資金は金である [[ FUND IS MONEY ]]  
(categorization)
- iii. 石油は金である [[ OIL IS MONEY ]]  
(?)
- iv. 時間は金である [[ TIME IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor confirmed)
- (54) a. 時間は時間である [[ TIME IS TIME ]] (自明)
- b. 非自明なカテゴリー化, ないしは概念メタファー
- i. 資源は時間である [[ RESOURCE IS TIME ]] (?)
- ii. 資金は時間である [[ FUND IS TIME ]]  
(?)
- iii. 石油は時間である [[ OIL IS TIME ]]  
(?)
- iv. 金は時間である [[ MONEY IS TIME ]]  
(conceptual metaphor)

これらのうちの全部が意味をもつわけではなく、適切なもののみが認定されなければならない。

この語群のクラスわけからは、語の位置づけが (a) 正真正銘のカテゴリー化によるもの (e.g., (51(b) i, (51(b) ii))) なのか, (b) 概念メタファーによるもの (e.g., (52(b) iv), (24)) なのか, (c) 概念メタファーを媒介にしない概念拡張によるもの (e.g., (51(b) iii)) なのか, (d) 無意味で、どれにも拠らないによるものなのかは明らかではない。

この段階で概念メタファー理論の本質的な欠陥が明らかになる:

- (55) 概念メタファー写像理論のもっとも深刻な問題は, (a), (b), (c), (d) を区別する認定基準が明示的ではなく, 研究者の直観だという点にある。

概念メタファーとそうでないものの区別は, 概念メタファー理論では明示的に操作的な形では, 述べられない。§4.1.1 の (92) で挙げる「定義」があるだけである。だが, この定義は, 比喩性の認定には使えない。それは比喩と非比喩をカテゴリーカルに要求す

るだけで, 比喩性の指標を与えないからである<sup>11)</sup>。これでは明らかに研究者の恣意は免れえない。

直観に導かれることは, それ自体は悪いことではない。だが, 直観のみを信頼するのは, とんでもない落とし穴が待ち受けている。過去に荒唐無稽に陥った多くの科学理論が辿った道が, それだったからである。

### 3.2.2 概念メタファーの認定基準 (提案)

Lakoff 学派のメタファーの認定基準は甘すぎて, 事実上, ないも同然である。彼らによれば,

- (56) 語  $w$  の字義通りの意味を  $m$  とするとき,
- a. ある文脈で語  $w$  が  $m$  以外の「非字義的」意味  $m'$  で用いられ,
- b.  $m'$  がメトニミーと分類できないならば,  $m'$  はすべて  $w$  が表わす概念のメタファー (写像) の結果である

ということになる。だが, この認定基準は明らかに寛容すぎ, 比喩という説明概念の不必要な拡大による議論の混乱を招いている。

この杜撰な認定基準に代わって, 私は以下に規定するような, より限定的な概念メタファーの認定基準を提案する:

#### (57) 概念メタファーの認定基準:

§3.1.1 で定義した手順で得られた  $F$ : [[  $x$  IS  $y$  ]] ( $x, y$  は概念) の候補群 (例えば (51)–(54)) のうちで

- a.  $F$  の意味が通り (つまり [[ 石油は時間である ]] のようなデータによって支持されないものを除く),
- b.  $F$  が,  $y$  というクラスの下位クラス化としては適切に記述可能でない

という二つの条件を満足する場合のみを概念メタファーと認定する。

ただし, (57b) の適切な理解のためには, 概念拡張は比喩写像のみによって生じるわけではないという点を承知するのは, 急務である。特に「下位クラス化としては適切に記述可能でない」という点が—

<sup>11)</sup> メタファーが程度の問題であることを正しく認定したところで, それがメタファーの定義に反映されていなかったら, まったく無意味である。

最終的にそれをどう定義するかは別にして— 重要である。

Lakoff 派の研究者は特に (57b) に関して、非常に認定基準が甘い。彼らは可能な限り下位クラス化の規模を小さく、可能な限り概念メタファーのクラスを大きくしようとする。これは、彼らが確証バイアスのよって、(57b) を認めたがらないという傾向に起因するものと思われる。彼らは非字義通りの意味で語が使われていて、それがメトニミーでない場合、それがメタファーだと短絡する。こうして、メタファー以外の原因による概念拡張は、定義により存在しなくなる。だが、*y* というクラスの下位クラス化として *F* が適切に記述可能な場合には、たとえ *F* の意味が字義通りでなくても、概念メタファー以外の原因によって生じた *y* の概念拡張の結果である。

### 3.2.3 鍋島の CMT の修正案とその評価

[57, p. 121] は CMT の基本を修正し、次のようなメタファーの認定基準を提案している:

#### (58) メタファー認定の尺度

- a. 他のメタファーからはっきり区別できること (区分の尺度)
- b. 写像に抜けがないこと (写像 [の完全性] の尺度)
- c. 動機づけが確立していること (動機づけの尺度)
- d. モト領域に豊かな推論が存在すること (推論の尺度)

方法論的基礎をしっかりとさせ、従来のメタファー研究に顕著な恣意性を避けようとする鍋島の姿勢は高く評価したい。だが、問題は、これらの基準が本当に効果的かどうかである。数値的評価が可能でなければ、確証バイアスを逃れることは難しい。特に (58b) 妥当性に関しては、§3.5 で改めて議論する。

更に、鍋島 [55, p. 63 (46); p. 99 (96)] は次のようなメタファーの定義の修正案を提唱している:

(59) (一般に) メタファーとは離れた領域間の対応関係である。[55, p. 63 (46)]

(60) (認知言語学における) メタファーとは離れた領域間の写像 (構造的対応) である。[55, p. 63 (46)]

ここで鍋島が領域の間の距離に注意を払っていることは注目に値する。これは従来の CMT で完全に欠落していた観点である<sup>12)</sup>。

だが、彼の提案には、少なくとも三つの問題がある。第一に、距離に関して言うと、領域間の距離をどうやって算出するのか? それを計算する方法を明示しないで領域間の最低限の距離がメタファーの認定に必要なだということは、正しい、正しくない以前に、空虚である。

第二に、一般のメタファーの定義と認知言語学のメタファーの定義の区別するのは何のためなのか? それは結局、認知言語学という名の「象牙の塔」の中で安逸な暮らしを決めこむことではないのか? 私の見解では、認知言語学の内部でしか通用しないメタファーの定義と、その外で通用している定義があった場合、認知言語学内部のメタファーの定義は最大限に外部で通用している定義にあわせるべきである。

だが、鍋島 [55, p. 98] は次のように反対のことを主張する:

- (61) 構造的でない要素を動機付けとするメタファー表現の場合、言語データの收拾が非常に難しい。例えば/Achilles is a lion/という例を元にして、これをより抽象的なメタファーに一般化しようとするとき、言語データからどのように研究すればよいのか。/Johnny is a pig./ /Sally is a wolf./ などの言語表現を取り上げて、\*人間は動物である、という定式化を行なえばよいのか。あるいは、ライオンにまつわるさまざまな特徴 (鬃、家族をもつ、肉食である、昼間は寝ている、たまに狩りにでるなど) を記述してどれが比喻として使われるのかを記述すればよいのか。前者の「人間は動物である」という定式化はすでにメタファーとは思われない<sup>13)</sup> (むしろカテゴリー的包含あるいはカテゴリー的近接性であろう) 後者はさまざまな分野で行われている重要な研究だが言語データから有効な貢献はあまり期待できないと思われる<sup>14)</sup>。

ここに至って、メタファー一般の定義とメタファー研究の言語学的方法論との定義を別のもので捉える必要があるように思われる。すなわち、メタファーの定義としては第四節にあげた

<sup>12)</sup> 同様の問題点は [72] によっても指摘されている。

<sup>13)</sup> 因みに、この「すでにメタファーとは思われない」メタファーによる説明は [32] が存在の大連鎖のメタファー、並びに [[ GENERIC IS SPECIFIC ]] メタファーで試みられたものである。

<sup>14)</sup> 野澤と私が [68] で試みたのは、この路線のメタファー記述である。

(46) [= (59)] である . [...] これとは別に, 言語学的方法論としてのメタファー定義は (96) [= (60)] とするのがよいと思われる .

このような言語学中心のモノの考え方には, 少なくとも二つの理由から, 私には賛同しかねる .

まず, 第一の理由として, [51, 52] が Web コーパスを使用して “X is a { wolf; snake; shark }” の使い分けに関して示したように<sup>15)</sup>, このような非構造的なメタファーの研究が難しいという判断は, 単に言語学の従来データの收拾, データ解析の手法の限界の問題である . 第二に, 言語データから有効な貢献が期待できないと鍋島は考えているようだが, これにもハッキリと異論がある . 私が FOCAL [50, 66] という枠組みを提唱しているのは, 他にもなく, 象牙の塔に閉じこもりがち (認知) 言語学の記述範囲を広げるためである . 私は言語学と関連領域の統合をめざしているのであり, そうすることで, 言語学者が行ないがちな自分の研究分野で確立した研究手法に都合のよい研究対象の分離を拒絶しているのである . (認知) 言語学に固有のメタファーの定義を要請し, 分離主義を採るのは, Chomsky 派の言語学者が言語学に固有の言語の定義を要請し, 分離主義を取ったのと, 何ら変わるところがない . Chomsky 学派の台頭によって言語学が導かれた現状を見て, その種の分離主義が悲惨の元であったと思わないのは, 言語学と関連領域との関係で繰り返し現れる「言語学の自律性」の葛藤の根を正しく認識している者がすることではないように, 私には思われる .

この問題は論じ始めるとキリがないので, この辺で話題を戻し, 鍋島の提案の最後の第三の問題を論じよう .

鍋島の提案でもあいかわらず領域とは何であるかが不問となっている . 私が CMT の最大の問題だと思うのは「メタファーの成立単位はどんな概念構造か?」という根本的な問題に対し, 「その単位を領域と定義する」という循環論に陥っている点である . 説明から独立に「領域とは何か?」に明確な答えるような領域の認定条件を与えない限り, CMT は反証不能である . 以下の議論ではこの点を特に問題と

する<sup>16)</sup> .

### 3.3 (50II) の語群の分析からわかること

(50II) のクラス 2 の語句群からは, 次のようなカテゴリー化, ないしは概念メタファーの候補が見つかる:

(62) 資源は資源である [[ FUND IS FUND ]] (自明) [= (51a)] を除く, 非自明なカテゴリー化, ないしは概念メタファー

- a. 財産は資源である [[ PROPERTY IS A RESOURCE ]] (?)
- b. お金は資源である [[ MONEY IS A RESOURCE ]] (?)
- c. 食べ物は資源である [[ FOOD IS A RESOURCE ]] (categorization?)
- d. 人材は資源である [[ HUMAN RESOURCE IS A RESOURCE ]] (extended categorization?)
- e. 飲み物は資源である [[ BEVERAGE IS A RESOURCE ]] (extended categorization?)
- f. 情熱は資源である [[ PASSION IS A RESOURCE ]] (conceptual metaphor?)
- g. 電気は資源である [[ ELECTRICITY IS A RESOURCE ]] (categorization)
- h. チャンスは資源である [[ CHANCE IS A RESOURCE ]] (conceptual metaphor?)
- i. 能力は資源である [[ ABILITY IS A RESOURCE ]] (extended categorization? conceptual metaphor?)
- j. 森林は資源である [[ FOREST IS A RESOURCE ]] (categorization)
- k. 三万円は資源である [[ 30,000 YEN IS A RESOURCE ]] (categorization)
- l. 労力は資源である [[ EFFORT IS A RESOURCE ]] (extended categorization? conceptual metaphor?)

(63) 資金は資金である [[ FUND IS A FUND ]] (自明) [= (52a)] を除く, 非自明なカテゴリー化, ないしは概念メタファー

- a. 財産は資金である [[ PROPERTY IS A

<sup>15)</sup> この研究の詳細に関しては, [69] で詳しく紹介したので, そちらを参照願いたい .

<sup>16)</sup> この問題は後に, オンライン論文 [59] で詳しく取り上げた .



- FUND ]] (categorization)
- b. お金は資金である [[ MONEY IS A FUND ]]  
(??)
- c. 食べ物は資金である [[ FOOD IS A FUND ]]  
(conceptual metaphor?)
- d. 人材は資金である [[ HUMAN RESOURCE IS A FUND ]]  
(conceptual metaphor?)
- e. 飲み物は資金である [[ BEVERAGE IS A FUND ]]  
(conceptual metaphor?)
- f. 情熱は資金である [[ PASSION IS A FUND ]]  
(conceptual metaphor?)
- g. 電気は資金である [[ ELECTRICITY IS A FUND ]]  
(conceptual metaphor?)
- h. チャンスは資金である [[ CHANCE IS A FUND ]]  
(conceptual metaphor?)
- i. 能力は資金である [[ ABILITY IS A FUND ]]  
(conceptual metaphor?)
- j. 森林は資金である [[ FOREST IS A FUND ]]  
(conceptual metaphor?)
- k. 三万円は資金である [[ 30,000 YEN IS A FUND ]]  
(categorization)
- l. 労力は資金である [[ EFFORT IS A FUND ]]  
(conceptual metaphor?)
- (64) (お) 金は (お) 金である (自明) [= (53a)] を除く非自明なカテゴリー化, ないしは概念メタファー
- a. 財産は金である [[ PROPERTY IS MONEY ]]  
(??)
- b. お金は (お) 金である [[ MONEY IS MONEY ]]  
(categorization)
- c. 食べ物は金である [[ FOOD IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor?)
- d. 人材は金である [[ HUMAN RESOURCE IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor?)
- e. 飲み物は金である [[ BEVERAGE IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor?)
- f. 情熱は金である [[ PASSION IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor?)
- g. 電気は金である [[ ELECTRICITY IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor?)
- h. チャンスは金である [[ CHANCE IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor?)
- i. 能力は金である [[ ABILITY IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor?)
- (conceptual metaphor?)
- j. 森林は金である [[ FOREST IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor?)
- k. 三万円は金である [[ 30,000 YEN IS MONEY ]]  
(categorization)
- l. 労力は金である [[ EFFORT IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor?)
- (65) 時間は時間である (自明) [= (54a)] を除く非自明なカテゴリー化, ないしは概念メタファー
- a. 財産は時間である [[ PROPERTY IS TIME ]]  
(conceptual metaphor?)
- b. お金は時間である [[ MONEY IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor?)
- c. 食べ物は時間である [[ FOOD IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor?)
- d. 人材は時間である [[ HUMAN RESOURCE IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor?)
- e. 飲み物は時間である [[ BEVERAGE IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor?)
- f. 情熱は時間である [[ PASSION IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor?)
- g. 電気は時間である [[ ELECTRICITY IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor?)
- h. チャンスは時間である [[ CHANCE IS MONEY ]]  
(extended categorization?)
- i. 能力は時間である [[ ABILITY IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor?)
- j. 森林は時間である [[ FOREST IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor?)
- k. 三万円は時間である [[ 30,000 YEN IS MONEY ]]  
(categorization)
- l. 労力は時間である [[ EFFORT IS MONEY ]]  
(conceptual metaphor? extended categorization?)
- [[  $x$  IS A RESOURCE ], [[  $x$  IS A FUND ], [[  $x$  IS MONEY ], [[  $x$  IS TIME ]] は (51), (52), (53), (54) と共有されているが, クラス 2 には, これらの他にも, 次のような興味深い概念メタファーの可能性が含まれている:
- (66) [[ 食べ物 ]] モデルに基づく概念の再解釈
- a. 食べ物は食べ物である [[ FOOD IS FOOD ]]

- (自明)
- b. 非自明なカテゴリー化, ないしは概念メタファー
- i. 財産は食べ物である [[ PROPERTY IS A FOOD ]] (conceptual metaphor?)
  - ii. お金は食べ物である [[ MONEY IS A FOOD ]] (conceptual metaphor?)
  - iii. 人材は食べ物である [[ HUMAN RESOURCE IS A FOOD ]] (conceptual metaphor?)
  - iv. 飲み物は食べ物である [[ BEVERAGE IS A FOOD ]] (extended categorization?)
  - v. 情熱は食べ物である [[ PASSION IS A FOOD ]] (conceptual metaphor?)
  - vi. 電気は食べ物である [[ ELECTRICITY IS A FOOD ]] (conceptual metaphor?)
  - vii. チャンスは食べ物である [[ CHANCE IS A FOOD ]] (nonsense?)
  - viii. 能力は食べ物である [[ ABILITY IS A FOOD ]] (conceptual metaphor?)
  - ix. 森林は食べ物である [[ FOREST IS A FOOD ]] (conceptual metaphor?)
  - x. 三万円は食べ物である [[ 30,000 YEN IS A FOOD ]] (nonsense?)
  - xi. 労力は食べ物である [[ EFFORT IS A FOOD ]] (nonsense?)
- (67) [[ 飲み物 ]] モデルに基づく概念の再解釈
- a. 飲み物は飲み物である [[ BEVERAGE IS (A) BEVERAGE ]] (自明)
  - b. 非自明なカテゴリー化, ないしは概念メタファー
    - i. 財産は飲み物である [[ PROPERTY IS A BEVERAGE ]] (conceptual metaphor?)
    - ii. お金は飲み物である [[ FUND IS A BEVERAGE ]] (conceptual metaphor?)
    - iii. 食べ物は飲み物である [[ FOOD IS A BEVERAGE ]] (extended categorization?)
    - iv. 人材は飲み物である [[ HUMAN RESOURCE IS A BEVERAGE ]] (conceptual metaphor?)
    - v. 情熱は飲み物である [[ PASSION IS A BEVERAGE ]] (conceptual metaphor?)
    - vi. 電気は飲み物である [[ ELECTRICITY IS A BEVERAGE ]] (conceptual metaphor?)
    - vii. チャンスは飲み物である [[ CHANCE IS A BEVERAGE ]] (conceptual metaphor?)
    - viii. 能力は飲み物である [[ ABILITY IS A BEVERAGE ]] (conceptual metaphor?)
    - ix. 森林は飲み物である [[ FOREST IS A BEVERAGE ]] (conceptual metaphor?)
    - x. 三万円は飲み物である [[ 30,000 YEN IS A BEVERAGE ]] (conceptual metaphor?)
    - xi. 労力は飲み物である [[ EFFORT IS A BEVERAGE ]] (??)
- (68) [[ 労働の際に費やす労力 ]] モデルに基づく概念の再解釈
- a. 労力は労力である [[ EFFORT IS AN EFFORT ]] (自明)
  - b. 非自明なカテゴリー化, ないしは概念メタファー
    - i. 財産は労力である [[ PROPERTY IS AN EFFORT ]]
    - ii. お金は労力である [[ FUND IS AN EFFORT ]] (extended categorization?)
    - iii. 食べ物は労力である [[ FOOD IS AN EFFORT ]]
    - iv. 人材は労力である [[ HUMAN RESOURCE IS AN EFFORT ]]
    - v. 飲み物は労力である [[ BEVERAGE IS AN EFFORT ]]
    - vi. 情熱は労力である [[ PASSION IS AN EFFORT ]] (extended categorization?)
    - vii. 食べ物は労力である [[ FOOD IS AN

- EFFORT ]]
- viii. 電気は労力である [[ ELECTRICITY IS AN EFFORT ]] (extended categorization?)
- ix. チャンスは労力である [[ CHANCE IS AN EFFORT ]]
- x. 能力は労力である [[ ABILITY IS AN EFFORT ]] (extended categorization?)
- xi. 森林は労力である [[ FOREST IS AN EFFORT ]]
- xii. 三万円は労力である [[ 30,000 YEN IS AN EFFORT ]] (extended categorization?)

他にも幾つか可能な概念化のパターンがあるが、省略する。

### 3.3.1 概念拡張と概念メタファーの境界

繰り返しになるが、概念メタファーをカテゴリー化から弁別し、無関係な関係づけ排除する原理、手法は自明ではない。特に概念拡張と概念メタファーの境界は、非常に微妙である。だが、多くの言語学者は自覚がないか、それに気づいていても、有効な対処法がないので、目をつぶっているように見える。

それと同時に、概念拡張と概念メタファーの境界の特定が困難であることを理由に、カテゴリー化と概念メタファーの区別がないかのように示唆したり、主張したりするのは、根本的に誤りである。それは「程度の問題症候群」であり、この病気に関する私の見解は [58] で詳しく展開した。

ここで私は、次の重要な点に注意を促したい:

- (69) 概念拡張と概念メタファーの境界の特定は言語学者の直観で何とかなる類いのものではない。区別を実証的なものとしようと思ったら、数値化が不可欠である。

この点に関して、言語学者は自分の能力を過大評価しない方がいいだろう。信頼性のある結果を得ようと思ったら、多変量解析が不可欠であろう。私はこの論文で実行した語彙調査によって、その簡略版を実践したつもりである。

### 3.3.2 概念拡張は比喻写像を前提とするか?

過剰般化を回避するための「保守」的な概念メタファーの認定に関して非常に重要なのは次の二つの

点を区別し、混同しないことである:

- (70) a. 概念拡張の存在:  
概念  $C$  が(どういう仕組みによるものかはわからないが) 概念  $C'$  に“拡張”されていること、
- b. 概念(比喻)写像による概念拡張の“説明”(あるいはモデル化):  
 $C$  に概念(比喻)写像が働いて、その結果として  $C'$  が生じていること

Lakoff らの説明は、(メトニミーを除く) ありとあらゆる概念拡張の事例を (70b) で「説明」しようとし、その結果、見事に失敗している。なぜか? 理由は簡単である: (70a) が妥当する現象に対し、そもそも (70b) で説明しなければならない必然性はないからである。(70b) よりも“弱く”, 単純明快な説明があれば、そのほうが常に好ましい。経験科学は常に“より弱い”説明を求める。弱い説明を求めるとは、可能な限り過剰般化を避けるということである。

これに対し、人文系の研究者は可能な限り“強い”説明を求め、過剰般化に奔る傾向が顕著であり、それ以上に、自分たちが経験科学の説明の妥当性の基準から逸脱しているという自覚がない。これは危険な傾向である。

### 3.3.3 [[ 時間は資源である ]] と [[ 時間は(お)金である ]] の関係

§2 の考察で明らかになったように、「時間」と「お金」が異なる共起パターンをもち、[[ TIME IS MONEY ]] が無条件に認定されるわけではない。このことは、図 1 や §2.6 の (23)–(29) を通じて、すでに見た通りである。

今回の資源性のあぶり出しを標的にした調査では、それとは反対に、「時間」と「お金」が非常に似通った反応を示している。これは資源性の観点、すなわち「お金」と「時間」の違いを捨象した抽象的な次元では、二つの語の表わす概念がよく似ていることを示唆している。とはいえ、これは別に矛盾したことはない。[[ TIME IS MONEY ]] と [[ TIME IS A RESOURCE ]] とでは概念化のレベル、特徴の抽象性(あるいは反対に具体性)のレベルが異なるというだけの話である。

### 3.4 議論のまとめ: 「時間は資源である」は概念メタファーか?

以上の議論の下で、「時間は資源である」は概念メタファーかどうかをまとめておこう。

#### 3.4.1 定量的データ解析の結果から得られる結論

以上の分析から強く示唆されるのは、非比喩的に「時間は資源である」ことである。少なくとも、「時間は資源である」が概念メタファーでなければならない理由は、データによっては示唆されていない。

「資源」概念を定義する信頼できる方法が確立していない以上、結論として、次のように言うのが適切であろう:

- (71) 少なくとも実証的に論じられる範囲では、「時間は資源である」が概念メタファーだと認定できるほど十分な証拠はない。

実際、「時間は資源である」が概念メタファーなのか、単に「資源」概念の拡張に基づくカテゴリー化なのかは決め難い。だが、次のように言えば、「時間は資源である」が概念メタファーでないとする理由には十分であろう: 概念メタファーの存在仮説は、概念メタファーによらない概念拡張の存在仮説より強い仮説である。従って、「時間は資源である」が概念メタファーではなく、単なる概念拡張の一例だと見なすべきである。

だが、このことは理論的に重大な含意をもつ。この節の最後に、その点を明確にしてみよう。

#### 3.4.2 比喩の基盤は先領域概念の抽象性と無関係

具体例を定量的な手法で解析し、その結果が示唆していることを(確証)バイアスのない目で見ると、Lakoff らが抽象的概念の代表例と見なしている「時間」が非比喩的に理解されているのは明白である。

だが、これは CMT の大前提に真っ向から衝突する。Lakoff 派は繰り返し繰り返し—Glucksberg らの(反証)実験 [20], Murphy の批判 [39, 40] にもめげず—「「具体的経験を通じて抽象的经验を理解する」必要性のために概念メタファーは必然的に存在する」と主張する。もちろん、これは私の得た結果によっても支持されない。

ここで、次のように問い直してみるの、有意義だと思われる: 元概念の具体性と先概念の抽象性の関係は、本当に概念メタファーと関係があるのだ

ろうか? 例えば、時間は—Lakoff 派が唱えるように—抽象的で具体的な経験が伴わず、比喩なしには概念化できない対象なのだろうか? この答えは、概念化とは何であるかの定義に依存する。

抽象的で具体的な経験が伴わない概念が比喩なしには概念化できないと考える必然性は、理論的には存在しない。例えば、生態心理学の知見を取り入れれば、時間は(概念メタファーを媒介とする概念化なしに)“知覚可能”だと十分に考えられる。実際、「時間」というものを—Turvey らが巧妙な実験 [41, 48, 47] で示したように<sup>17)</sup>—ヒトがモノをふり回して知覚する慣性モーメントという不変項から間接的に“知覚”される、そのモノの長さと同じように、モノの状態の認識から間接的に“知覚”されるものだと考えてはならない理由はあるのだろうか? Lakoff と Johnson, 並びに彼らの追従者がそうしない理由は、彼らに想像力が不足しているから、あるいは自然科学の教養が不足しているからでないのかどうかは、私にはわからない。いずれが正しい説明であるにせよ、彼らの論法と証拠が反自然科学的な傾向のある評価者の無知につけこむのは確かである。

以上の点を念頭に置くと、次の可能性はかなり高い:

- (72) 先領域の概念と元領域の概念のあいだの抽象性の次元での落差は、概念メタファーの成立条件とは何の関係もないか、あるとしても弱い相関のみである。

これはもちろん、Lakoff 派の主張である“「具体的経験を通じて抽象的经验を理解する」必要性のために概念メタファーは必然的に存在する」と矛盾するが、これまで見てきたように、彼らの主張には我田引水的な根拠しか伴っていない。

#### 3.4.3 CMT の理論的基盤で本当に問い直さなければならぬもの

以上の考察から私たちは次のような点に導かれる: CMT の理論的基盤で本当に問い直さなければならないのは、おそらく“[経験] とか [概念] が具体的/抽象的であるとはどういうことか?”である。

実際、何が抽象性、具体性を決めているかという

<sup>17)</sup> [71, pp. 127–148] に、Turvey らの実験に関する平易な解説がある。

問題に関して、CMT は理論から独立した、非自家撞着的な定義をまったく与えてない。CMT の支持者はせいぜい、「[[  $T$  IS  $S$  ]」の概念メタファーで  $T$  になるものが  $S$  に較べて抽象的だと事の始めに「定義」しているだけなのである。これはもちろん、理論から独立した仮定ではないし、経験的に妥当性が検証されているわけでもない。だが、CMT の支持者の多くは、「[[  $T$  IS  $S$  ]」の概念メタファーで  $T$  になるものが  $S$  に較べて抽象的なのは、彼らが始めにそう想定したからだという点を忘れ、その定義が、観察的な事実であるかのように議論を進める。これは明らかに論点先取であり、実証的なデータでは反証不能である。

具体的経験と抽象的経験の区別は、決して自明ではない—少なくとも、Lakoff 学派が安易に信じているようには明らかではない。例えば「台風は具体的か?」「地震は具体的か?」「吹雪は具体的か?」と自問してみると、具体/抽象の明確な区別はどんどん怪しくなって来る。

次の点には特に注意が必要であろう: 実際、感覚 (sensory input) を重視しすぎるという点で、CMT は生態心理学 [16, 44, 71, 70] が批判する「古典的」認知主義の典型 (的犠牲者) である—もちろん、彼らにはそういう自覚はないのであろうが。

### 3.5 鍋島の提案するメタファーと疑似メタファーの区別は有効か?

ここで少し論点を変えて、修正主義的改良によって CMT がどれぐらい保持できるかを見てみよう。

#### 3.5.1 「問題は植物である」の妥当性

鍋島 [57, pp. 125–126] は「問題」の概念化のパターンを概念メタファーの観点から考察し、(75) のように論じている:

- (73) a. 問題の種
- b. 問題の根
- c. 問題の芽を摘む
- (74) a. \*問題が芽生える
- b. \*問題の花が咲く
- c. \*問題が枯れる

(75) (73) が言えることから、一見「問題は植物である」という概念化が存在するかのように見える。しかし、(74) は不可能である。

「芽生える」「花が咲く」などはプラスの価値評

価を持っているが、もし、問題は植物であるという概念化が存在するならば、(74) は可能ではなくであるが、これはよくない。

そこで、「問題は植物である」というメタファーは存在せず、これは具現化であることを主張したい。

だが、このような恣意的排除を許すのは次の理由で「理論化のための理論化」であるように私には思われる。第一に、具現化が何であるか、特にメタファー的概念化と具現化の関係が明確ではない。第二に、具現化が明確であるとしても、何の具現化であるかを特定するという作業は研究課題のうちから消失するわけではない。以下ではこの二つを順に検討する。

#### 3.5.2 具現化を区別することの一長一短

まず、具現化の定義が明確だとは思われない。次に具現化の定義を [55, pp. 94–95] から引用する:

- (76) [...] 2つのプライマリー・メタファーの合成が起こることを示した。そして、合成の結果できなかった Viable Organization Is A Erect Physical Structure という複合メタファーが、Theories Are Buildings に変わるのは、建物が直立した構造体の具体例として登場するためと述べた。これは Langacker 理論の Elaboration や Instantiation であると思われるが、ここでひとまず具現化と呼び、この具現化の過程に関して、他の例を見ていきたい。ここでは2つの例を取り上げる。一つは「活動は移動体である」の例、もうひとつはすでに見た「人は石だ」の例である。

最初の場合について、(77) を例とする「活動は移動体である」に関して、[55, p. 96] は (79) のように言う:

- (77) a. プロジェクトが進む
- b. 結婚話が進む
- c. 新しい都市計画が進行している
- (78) a. プロジェクトのゴールは目の前だ
- b. プロジェクトが、一歩一歩ゆっくり進む
- c. プロジェクトが足踏み状態だ
- d. プロジェクトが立ち往生した

(79) (78) のようなデータをしてプロジェクトは人である、というメタファーを立てるのは早計であろう。人間に限らず、活動を移動と捉える表現はさまざま存在するので、メタファーの定式としては、活動は移動であるとし、移動するものの具現化とし

て人間に関する用語が使用されると捉える方がより [実態] に合致していると思われる。

これに続いて、[55, p. 96] は「山田さんは石 (のよう) だ」の可能な解釈に関して (80) の四つを例示し、(81) のように言う：

- (80) a. 山田さんは考え方に柔軟性が欠けている。頭が固い。  
 b. 何もしゃべらない。口が固い。  
 c. 山田さんは行動が遅い。腰がなかなかあがらない。  
 d. 山田さんはどっしりしていて、沈着冷静である。

- (81) ここでは、石の重さ、あるいは固さが重要なのであり、「石」というのはその具現化に過ぎないように思われる。言語学的に見たメタファーの定式化のレベルとしては、「人は石だ」というのは正しくなく、(80a) の意味の場合は、「柔軟性に欠けていることは固いことである」、(80c)、(80d) の意味の場合、「行動は動きである」というメタファーの一例として考えるのが妥当であろう。

だが、難点は尽きない。鍋島がメタファーだと認定している  $P$ : [[  $x$  に柔軟性に欠けることは  $x$  が固いことである ]] 特徴はメタファーではなく、 $x$  に関する単なるカテゴリー化ではないのだろうか？ 例えば  $x$  が [皮革] の場合、[皮革に柔軟性に欠けることは、皮革が固いことである] は単なる皮革の柔軟性の定義である。

$x$  の指示範囲をもう少し広く取り、 $P$  が定義として通用しない範囲に拡張したとすれば、今度は  $P$  がメタファー性の規定としては循環論に陥ることになる。それは「 $x$  に柔軟性がある/ない」に、 $x$  に依存してメタファー性が潜伏することになるからである。実際、 $x$  が [人] の場合、[人に柔軟性がある/欠ける] 特徴は何を意味しているのだろうか？ [人の筋肉] に柔軟性があるというのは字義通りだが、[人の考え方] に柔軟性があるというのは、それ自体がメタファーである。これはメタファー性の起源に関して、明らかに循環的である。これを称して経験的基盤と言うのであれば、メタファーの経験的基盤の説明は、メタファー性の基盤の解明ではなく、隠蔽である。

### 3.5.3 CMT を制約した後に残るもの

仮に鍋島の提案が正しいとすると、一つ重要な帰結が得られる：それは、CMT の基本文献に現われる概念メタファー多くが実はメタファーではないという結論である。なぜそうなるのかを、(82) のような有名な例を取り上げて論証しよう：

- (82) a. [[ LOVE IS A JOURNEY ]]  
 b. [[ ARGUMENT IS WAR ]]

(82) が正確に規定している概念の内容はおのこの、(83) にある通りである：

- (83) a. [[  $X_J$  IS A JOURNEY ]]  
 b. [[  $X_W$  IS WAR ]]

鍋島の提案に関係なく、(82) が有意義な概念メタファーかどうかは、[[ LOVE ]], [[ ARGUMENT ]] が  $X_J$ ,  $X_W$  の具現化でないかどうかという問題に帰着する。

だが、これは有意味な区別を作りださない。ここで例えば、(84a, b) の差は、[[ VISIT TO MEXICO ]] と [[ LOVE ]] の差は具現化か否かの差ではなく、(83a) の具現化としての典型性の差でしかない。同様に、(85a, b) の差は、[[ FIGHT IN A BOXING GAME ]] と [[ FIGHT IN AN ARGUMENT ]] の差は具現化か否かの差ではなく、(83b) の具現化としての典型性の差でしかない。

- (84) a. *Look how far we've come, being in Mexico.* [[ VISIT TO MEXICO IS A JOURNEY ]]  
 b. *Look how far we've come, being about to marry.* [[ LOVE IS A JOURNEY ]]
- (85) a. *He defeated the new challenger, and remained the champion.* [[ FIGHT IN A BOXING GAME IS A FIGHT IN A WAR ]]  
 b. *He defeated the new critiques of his theory, and remained the king of linguistics.* [[ FIGHT IN AN ARGUMENT IS A FIGHT IN A WAR ]]

鍋島の提案は確かに、CMT の過剰な記述力を制約するという目的の下では好ましいことである。だが、皮肉なことに、彼の提案する制約を CMT に施すと、何も実質的な説明は残らない。このような事

態を見る限り、CMT がメタファーに関する何かを説明したと考えるのは根本的にムリがあることになるだろう。

#### 3.5.4 具体化はメタファー性と独立か?

第二の点として、鍋島の提案は、具現化と非具現化をうまく区別できるということが前提となっている。だが、それは果たして本当なのか?

鍋島の提案にとって致命的な可能性は、実はありとあらゆるメタファーに具現化が多かれ少なかれ関係していることである。このことは、私が [68, 69] で提唱した潜伏性の上位スキーマ化媒介モデル (Latent Super-schematization Mediation Model: LSMM) の理論的予想である (LSMM は §4.2 で簡単に紹介する)。私は実際、この根拠からメタファーと疑似メタファーのあいだの線引きが具現化の有無の基準で明確に区別できるという案の実行可能性を非常に怪しく思う。

結局、鍋島の提案は、穿った見方をすれば、体系的なもの、生産的なもののみが概念メタファーだと再規定し、CMT をうまく制約しようという努力だと理解することができる。だが、最初に注意しておいたように、これはまさしく「理論化のための理論化」、別名は「我田引水」である。それがメタファーに対して経験的に妥当な説明を与えらることは、私には考えられない。

#### 3.5.5 本質的な困難はなくなる

(73) のような表現の存在が [[ 問題は植物である ]] という概念メタファーを認定する基準としては寛容すぎるといえる点では、私は鍋島と同意する。だが、具現化か否かの観点でメタファーと疑似メタファーの区別を導入して問題を解決を計ろうとする鍋島の努力はうまくいっているとは考えにくい。

私は、鍋島の提案する (73) がメタファーではないとする CMT の問題点の「解決」策の本当の難点は、それが次の点に答えていない点だと考える:

- (86) (73) は、[[ 問題は植物である ]] が妥当な概念メタファーか否かメタファーに係わりなく、メタファー効果が伴うものであり、その理由が説明される必要がある。

実際、鍋島の提案に従って [[ 問題は植物である ]] が概念メタファーではなく (単なる) 具現化であると言い逃れたところで、(73) のような事例がメタ

ファーでなくなるわけではない。それは研究者が依拠する理論の「都合」によって、メタファーと疑似メタファーの恣意的な区別の捏造に過ぎない。これを (59) と (60) の峻別によって正当化するのは、(認知) 言語学者の恣意であり、エゴである。

従って、本当の問題は (73) のような正例 (positive evidence) が与えられているときに、それに基づいて [[ 問題は植物である ]] という大雑把な一般化を許していいかどうかであり、それを許して (結果的に) 得られた一般化の [[ 問題は植物である ]] が本当の概念メタファーであるか否かではない。とすれば、問題の本質は Clausner と Croft [12] が CMT に対して提起した難点 (9b) と同じである。以下では簡単に鍋島の分析に対する私の対案として、状況基盤の (73) と (74) の対比の説明を試みる。

なお、私の提案は、Clausner と Croft の提案と矛盾するものではなく、それを彼らが依拠している Bybee/Langacker の枠組みとは独立に体系化し、精密化したもの — 特に Clausner-Croft の説明の基幹となっているプロファイル化 (profiling) という特徴を意味役割の特定という観点から再規定したもの — だと考えることができるだろう。

#### 3.5.6 メタファーの基盤は状況固有の概念化

(73) を説明する妥当な概念メタファーは (87) で、それは (88) の特殊な場合であろう:

- (87) [[ 問題は (駆除の対象となるような) 有害な植物である ]]  
 (88) [[ 問題は (外) 敵である ]]

因みに、(88) が鍋島 [56] で有意義な「問題」の概念化として認定されていることには注意を促しておきたい。(87) は私が強調する個別的な (駆除) の状況に基盤をもつ概念化であるが、これがメタファーの定式化として一般性を欠くという批判は、まったく見当外れである。そもそも CMT を前提としない限り概念メタファーが一般的である必要はなく、それが一般的でなければならないと説き、その必要性を捏造しているのが CMT だからだ。

実際、(87) が私が強調する個別的な状況 (この場合は (駆除)) に基盤をもつ問題の概念化であることの証拠は、次のような事実反映されている。

まず、(73a) の「種 (タネ)」は (駆除の必要のある有害な生命体の発芽前の状態) を意味し、植物一

般の種のことを意味しているわけではない。これは (89a, b) の対比から明らかである。

- (89) a. その問題の種は非常に { しぶとい; 手ごわい }  
b. ?\*その問題の種は非常に珍しい。

同様に, (73b) の「根」は〈駆除の必要のある有害な生命体の〈養分摂取〉兼〈体制保持〉のための器官〉を意味し, 植物一般の根のことを意味しているわけではない。これは (89a, b) の対比から明らかである。

- (90) a. 問題の根は深い (ので, なかなか駆除できない)  
b. \*問題は根は腐っている (ので, 駆除の必要がない)

問題なのは「問題」が〈有害性をもつ生命体〉であること, つまり〈敵〉であることなのであるが, その有害性が雑草の有害性に結びつけられているということなのである。

最後に次のことを補足しておきたい。(87) では (73c) の容認困難性が説明できないと思われるかも知れない。他の場合ほど単純明快ではないが, 同じような状況基盤の説明は可能である。 $x$  が植物の時 [  $x$  が枯れる ] というのは, 以前に [  $x$  が生茂る ] 状態があったことが含意される。これが問題の概念化とうまく一致しないことが (73c) が奇妙である原因なのを理解するために, まず「問題の種」と「問題の根」の概念化の詳細を明らかにしておこう。

「問題の種」は後に〈発芽〉=〈発現〉=〈発覚〉する潜在的可能性に関する概念化, 「問題の根」では, すでに後に〈発芽〉してしまった潜在的可能性を駆除する際の具体的手段 = 〈引っこ抜く〉に関する概念化である。

これに対し, 次の (91) の例はどれも意味をなさないという事実に注目して欲しい:

- (91) a. \*問題の葉  
b. \*問題の花  
c. \*問題の茎 (cf. ???問題の根茎)

これが示しているのは, 「問題の  $y$ 」で  $y$  が植物が〈茂っている〉とき, 〈開花している〉ときの特徴である場合には, 軒並みメタファーとして逸脱した

ものにしかない。この特徴は一貫したものであり, 体系的である。「問題が枯れる」が奇妙なのは, その前提の「\*問題が茂る」「\*問題が咲く」「\*問題が伸びる」「?\*問題が育つ」のような特徴と衝突するからであると考えるのが (73c) の逸脱の説明としてはイチバンもっともらしいと私は考える。

#### 4 概念メタファー理論の説明力の評価

以上で検討した事実は CMT の反証ではなく, 先領域の覆し (Target Domain Overrides: TDO) で説明できる事実だと反論する研究者もいるだろう。だが, これは反論にはなっていない。この節では, その理由を述べる。

##### 4.1 不変性原理で「保護」された比喩理論は説明理論として強力すぎる

###### 4.1.1 先領域の覆しの「機能」

通常, CMT の説明は先領域の覆しを許すことを前提としている。だが, その説明にどれほど内実があるかは, 理論的整合性とは別の基準で評価されなければならない。端的に言うと, 統合的な理論が空虚な理論でないという保証はない。

比喩写像に不変性原理 (Invariance Principle) の成立を要請し, 先領域の覆し (TDO) を許す比喩写像理論が規定している内容は, 事実上, 次に等しい:

- (92) a. 比喩は概念写像  $M: S \rightarrow T$  によって元領域  $S$  の概念構造を先領域  $T$  に写像し, その際,  $S$  のイメージスキーマ構造  $S^*$  を保存する。  
b. ただし,  $M$  (自体が  $S^*$  の保存か) が  $T$  の内容との非互換性によって退けられるという例外を除く。

先領域の覆しが規定している内容は, 論理的には (92) の「例外を除く」という部分であるが, 問題はこの「例外」性なのである。

###### 4.1.2 「例外」は本当に例外か?

(92b) で CMT が規定する「例外」が例外的に「少数」であるという保証はない。この意味での例外性は「定義にあっていない」という意味であって, 次のことに気づくことは例外性の錯覚 (exceptionality fallacy) を避けるために必要不可欠である:



- (93) これらの例外が無視できるほど数が少ないという条件が経験的に満足されているという保証は、実はどこにもない。

例外が例外であるとされる理由は、それが「少数であり、説明全体に対する影響が少ない」ということなのであるが、「説明全体に対する影響」がいつのまにか「理論に対する影響が少ない」と読み替えられてしまっている。

「少数であり、説明全体に対する影響が少ない」という本来の意味での例外性は(92)の定義からはまったく帰結しない。従って、それは(92b)とは独立に実証される必要がある。

先領域の覆しが「数として少数であり、説明全体に対する影響が少ない」という正しい意味での「例外処理」になっているかどうかは、CMTの理論から論理的に帰結可能な事柄ではない。それは経験的に評価されるべき事柄である。(92)のような我田引水の形で例外を決めることは、Chomsky派の言語学者が文法事象の「中核と周辺」を規定する際に、「中核性」と「周辺性」の条件を自分の理論に都合のよいように、恣意的に決めているのと同じである。

理論的に重要でないことを例外だと見なす傾向はどの分野でも顕著であるが、それには理由がある：ある現象  $P$  が理論的に重要でない理由は、非常に多くの場合、 $P$  が理論によって説明可能でないからである。この意味で、例外性の誤謬は非常に強い説明の誘惑 (explanation temptation) に根差しており、経験を積んだ科学者でも避けることが非常に難しい<sup>18)</sup>。実際、これが元で科学の様々な領域で数々の体系性の錯覚 (systematicity fallacy) が生じている。

経験的データに基づいて私が示唆しているのは、次の可能性である：

- (94) CMTの予測する「一般性」を破り、TDOで退けられている「例外」群は、実は「数少」の、「無視してよい」例外ではなく、逆に現象の大半である。

この種の「例外性に関する錯覚」は言語学に頻発するが、これは言語学に限ったことではなく、多くの自然科学にも発生する。例えば、これは、線型近似できる、いわゆる「解ける」現象ばかり扱っていると、いつのまにか世の中には線型現象があふれていて、非線型現象が「例外」だと錯覚するのとよく似ている。そのような錯覚に陥っている自然科学者は非常にたくさんいるけれど、世の中の大半の現象は、彼らの思いこみに反して、非線形である。よく知られているように、これはカオス理論、複雑性の科学の到来の「思想的障害になった」[19, 49]。

この線型性の思いこみのアナロジーからもわかるように、CMTが理論的記述可能性と一般性を混同し、ありもしない例外性を想定している可能性があるし、私の見こみではCMTは確実にそうしている。私が§2.6, §3.2で扱ったデータで示そうとしているとは、まさにそのことなのである。

#### 4.1.3 概念メタファー理論は反証可能か？

仮に例外が本当に「少数」の例外だとしても、まだ問題は解決しない。

(92)が意味することは次である：

- (95) CMTの反証不能の可能性：

先領域の覆しの経験的内容が明示され、「例外」がいつ成立するかが事前に予測できない限り、(92)は常に成立し、それ故、概念メタファー理論は反証不能である。

先領域の覆しが有限個の規則で述べられるかどうかは、実は論理的には明らかではなく、不変性原理が経験的内容をもつ規定かどうかは、その定義からはわからない。従って、不変性原理を仮定するCMTが反証可能で有意な理論であるという保証はない。

この問題回避するためには、先領域の覆しが有意な収束を示すこと必要であるが、それは無条件には与えられず、経験的な調査によって理論とは独立に検証されなければならない。だが、私に見る限り、そのような努力は皆無である。

#### 4.1.4 内実の伴わない大言壮語

仮に先領域の覆しが有意な収束を示すとしても、それでも問題はなくなる。

だが、不変性原理で守られたCMTの主張の内容をよくよく考えて見よう。それは実際には、次のよ

<sup>18)</sup> Gouldのエッセイ集『ニワトリの歯(上)』[21]の序文に「不確実ですんだ世の中に生きるわれわれは、何か明確で規則的なものを祝うという誘惑に抵抗できない」とあるのも、この事と無関係ではない。ここでGouldが言っているのはDarwin没後100周年の事であるが、何についての規則性であるかは、実際まったく問題ではない。

うな非常に弱い主張に過ぎない:

(96) [[ ある種の  $T$  はある種の  $S$  である ]]

例えば,

- a. [[ ある種の時間はある種のお金である ]]
- b. [[ ある種の愛はある種の旅である ]]
- c. [[ ある種の議論はある種の戦いである ]]

これは「ある種の  $T$ 」や「ある種の  $S$ 」の「ある種の」という限定が「この種の」という形で明示可能でない限り、常に成立し、それ故、反証不能である。

Lakoff らが [30, 31] のような著書で主張している内容と経験的に CMT が述べている内容とのあいだには非常に大きな隔りがある。(96) に述べた程度に限定された予測力しかもたないのに対し、彼らの主著はまるで比喩がヒトの思考や認知のパターンの重要な部分を説明するかのような強い調子で描かれている。これは貧弱な説明力を隠した信用詐欺、あるいは内実の伴わない大言壮語以外の何ものであるのだろうか?

見方を変えると、次のことも言える。(96) という形に明示化していみる、CMT が「説明」している内容は実に些細なこと、ほとんど自明なことである。(96) にある程度の説明力しない理論に、いったい何の説明的価値があるのだろうか? そんなつまらない理論を追求することの、いったいどこが楽しいのだろうか? 私にはさっぱりわからない。

#### 4.1.5 より単純な説明を求めて

仮に先領域の覆しに経験的な内容があり、CMT が反証可能な理論だということになったとしても、それで話が終るわけではない。まだ次の可能性が残っているからである:

(97) 不変性原理によって守られた CMT は、もっと単純明快に説明可能な内容を、不必要な仮定の導入(比喩写像、不変性の原理)によって意味もなく複雑にしている。

これが意味するのは、ちゃんと探せば、CMT より、もっと単純で精練された説明モデルが見つかるはずだということである。実際、そのような説明の枠組みは上位スキーマ化(媒介)モデル(super-schematization (mediation) model) という形で [68, 67, 69] など示唆されている。その概要を、簡単に解説しておこう。

#### 4.2 上位スキーマ(化)媒介モデルの概要

上位スキーマ化モデルの概要を簡単に言うと、次のようにある:

(98) あるフレーム  $F$  (元) から別のフレーム  $G$  (先) への比喩写像関係  $M$  が成立するのは、(i)  $G$  が字義通りに解釈され、(ii) 次の条件を満足する  $H$  が  $M$  を媒介にするとき (i.e.,  $M(x) = i(h(x))$ ) に限る:<sup>19)</sup>

- a. フレームは(意味)素性の組織化としてのスキーマ(schema)であり<sup>20)</sup>,
- b.  $F[+f]$ ,  $G[-f]$  に素性  $f$  の値に対立があるとき、その対立の中和された  $H[\pm f]$ <sup>21)</sup>を ( $F$ ,  $G$  に共通の) 上位スキーマ(super-schema)だとする
- c.  $F$ ,  $G$  は当然  $H$  の具現化(instantiations)、ないしは肉づけ(elaborations)である<sup>22)</sup>.
- d.  $h: F \rightarrow H/G$  の効果を  $F$  の ( $G$  のための) 上位スキーマ化(super-schematization)と呼ぶ<sup>23)</sup>.

(98) の内容は概念図 3 に示した。

非常に大雑把に言うと、 $h$  は、概念構造  $F$  の別の概念構造  $G$  への“適応”で、Piaget 風と言うスキーマ

<sup>19)</sup> [42, 45] は私と同じ問題意識をもつ先駆的な研究であるが、上位スキーマ(化)の必要性を重要性を私ほど認識していないようである。少なくとも上位スキーマ化をどうやって実現するかという実装の問題は彼らの念頭にはないようだ。

<sup>20)</sup> 私はスキーマという概念を [1, 2, 36, 43] スキーマ理論の伝統に沿う、厳密な意味に使っている。私の観点からすると、[31, pp. 161-169] に登場する資源スキーマ(resource schema)は資源のスキーマではない。それは活動のスキーマ化(あるいは概念化)であり、資源はそのスキーマの構成物である。

<sup>21)</sup>  $[\pm f]$  を  $[?f]$  と書くこともある。

<sup>22)</sup> 私は具現化と肉づけを完全に同義的なものだと見なしているが、ここ、並びに他の場所での具現化の考え方について少し補足する。私が(具体)事例化と呼ぶ操作は、本当の事例を生成される心内/脳内プロセスではない。それは、具体性の少ない高次のスキーマ(的(心内)表象)から(具体)事例に相当する程度に具体的なスキーマ(的(心内)表象)が生成されることである。

一般に認知言語学—並びに認知心理学、認知科学の一部—では、(具体)事例という説明概念に関する困った誤解がある。次のことを理解するのは、必ずである:(具体)事例だと見なされているのは、実は(具体)事例でも何でもなし。それらは(具体)事例だと見なされるレベルの、抽象度の低いスキーマのことである。

<sup>23)</sup>  $h$  は鈴木 [53] の規定する(準)抽象化(quasi-abstraction)と見なしてもよいだろう。

マ  $F$  の ( $G$  に対する) 調節/調整 (accommodation) である。

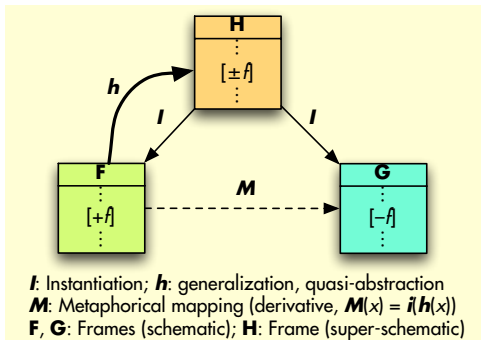


図3 上位スキーマによる比喻写像  $M$  の媒介:  $F$  は元領域,  $G$  は先領域に相当

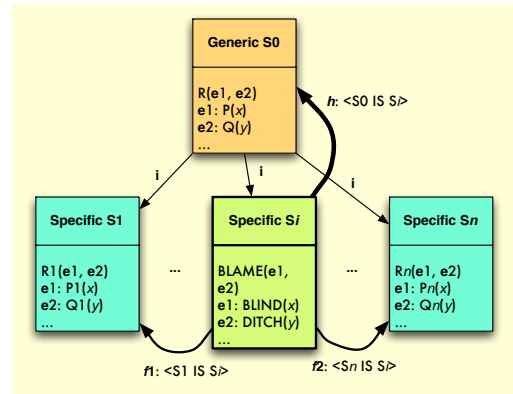


図4 「GENERIC IS SPECIFIC」の写像の構造 (“Blind blames the ditch” の場合)

4.2.1 上位スキーマ化モデルは、比喻と比喻でないものを明確に区別する

CMT では、概念メタファーの定式化自体が杜撰であるため、比喻と比喻でないものの境界が非常に曖昧である。概して言うと、CMT では字義通りでない意味があれば、それらはすべて概念メタファーと見なされる。この顕著な例が、「一般性は特殊性である」(「GENERIC IS SPECIFIC」)のメタファー、あるいは一般レベルのメタファー (generic-level metaphor) と呼ばれるものである。

彼らのメタファーの認定は二重底であることに注意しよう。彼らは何らかの操作的な定義に基づいてメタファーを認定しているのではない。彼らのやっていることは、実は次なのである:

(99) 概念メタファー理論での比喻の認定条件

必要条件: 任意の語  $w$  について、 $w$  の意味が字義通りの意味で理解できないものであれば—つまり、 $w$  に意味拡張があれば—メタファーが原因であると疑われる。

十分条件: この意味拡張に異なる領域間の対応づけが関与していれば、メタファーである。

だが、これは明らかに概念メタファーの認定方法としては杜撰過ぎる。必要条件に関して、意味拡張がメタファー以外の要因で生じている可能性がマトモに考慮に入れられていない。そのため、異なる領域間の対応関係があるだけで、それがメタファーであることの十分条件であると見なされる。

この例に限らず、概念メタファー理論で概念メタ

ファーと呼ばれているものには異なる種類のものがあることを、上位スキーマ化モデルを用いて、図4に簡単に示すことができる。

Lakoff らが「GENERIC IS SPECIFIC」と呼んでいるのは図4では関係  $h$  である。これに対し、[32]以前に比喻と呼ばれていたのは  $f_1, f_2$  のような対応関係のみである。ここで、 $i$  は  $S_0$  から  $\{S_1, \dots, S_i, \dots, S_n\}$  への具現化の関係である。図3も参照のこと。

重要な点は、 $S_i$  は  $S_0$  の代表例 (representative case) だという点である。これが「GENERIC IS SPECIFIC」の成立条件である。これは、ある特殊事例 (e.g.,  $S_i = \text{“Blind blames the ditch”}$ ) から、それが代表する事例の集合  $S = \{S_1, \dots, S_n\}$  へのアクセス ( $f_1, f_2, \dots$ ) が「GENERIC IS SPECIFIC」の実態である。そのアクセスはすべて、上位スキーマ  $H$  を経由して行われる。

4.2.2 なぜ一般レベルの「メタファー」???

$\mathcal{F} = \{f_1, f_2, \dots\}$  のような対応関係の種類と  $h$  の対応関係の種類は同じではない。従って、仮にアクセスされる表象が同一であろうとも  $\mathcal{F}$  がメタファーである理由と  $h$  がメタファーである理由とは同じではない。実際、 $h$  がメタファーだと考えるのは、まったく必然性のない、認知科学の研究の伝統を無視した暴挙としか言いようがない比喻概念の過度の一般化である。このような過剰な一般化を行なうとき、Lakoff らは一般化や抽象化のような比喻以外の認知メカニズムに比喻を回収する可能性については、まったく考慮に入れていないように見

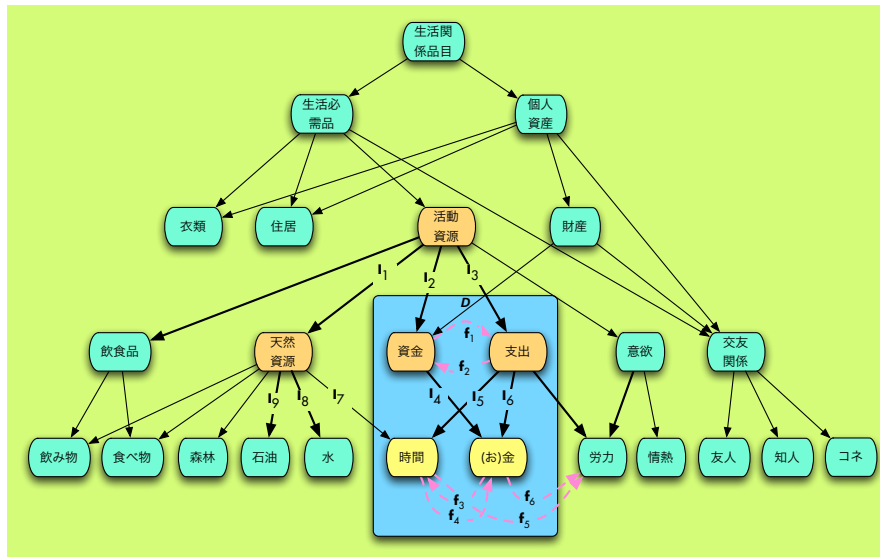


図5 資源性に関係する概念の部分的 HFN (紫色の破線は概念メタファーを表わす)

える<sup>24)</sup>。Lakoff は [[ GENERIC IS SPECIFIC ]] に関して、次のように言う：

- (100) ターナーと筆者はある個別の知識構造から共通レベルの構造を引き出す過程を指して、「共通性は個別性である」メタファー [[ GENERIC IS SPECIFIC ]] と呼んだ。自分たちはこれが一般を個別の観点から理解する一般的なメカニズムだと考えている。もし不変性仮説が正しいとすれば、「共通性は個別性である」メタファーは不変性仮説が要求することを最低限のレベルで満たすことによって写像を行っているメタファーであり、それ以上の何ものでもないということになる。[26, 邦訳, pp. 54–55]

そう呼ぶのは彼らの勝手だが、それに内実があるかどうかは、それとはまったく別の問題である。Lakoff が言うように、[[ GENERIC IS SPECIFIC ]] が「一般を個別の観点から理解する一般的なメカニズム」だと見なせるのはまちがいないが、それがメタファーである必然性はまったくない。この種の拡大路線は、Lakoff 学派に限らず、認知言語学の十八番であるのだが。

#### 4.2.3 CMT 陣内部での批判

この点は概念メタファー研究者のあいだでも自覚されており、例えば鍋島 [54, p. 147] は次のように

<sup>24)</sup> これが「比喩こそがヒトの思考の根源にあるものだ」という彼ら固有の確証バイアスによらないで起きたものだと、私には考えにくい。

[[ GENERIC IS SPECIFIC ]] が概念メタファーでない理由を五つ挙げている：

- (101) a. 定式化に反している；  
b. Generic と Specific の関係は抽象レベル上の関係である；  
c. Generic から Specific へは Instantiation の関係となる；  
d. ことわざに限らず、メタファー一般に Generic Level が存在；  
e. メタファーに限らず、一般に Generic Level が存在

これらはまったく正しい指摘である<sup>25)</sup>。

また、Grady [24, p. 91] も遠慮がちに<sup>26)</sup>、次のように言う：<sup>27)</sup>

- (102) We probably do not want to GENERIC IS SPECIFIC as a metaphor per se, if we would like to reserve the term for particular figurative pairings of concepts.

<sup>25)</sup> ただし、Lakoff [26, 28, 32] が [[ GENERIC IS SPECIFIC ]] で論じているのは、実際には、図 4 の Specific ( $S_i$ ) と Generic ( $S_0$ ) との関係ではなく、ある Specific ( $S_i$ ) から別の Specific の集合 ( $\{S_1, S_2, \dots\}$ ) の関係なので、定式化に反しているのは見かけだけの可能性もある。

<sup>26)</sup> if we would like to のような、猛烈に控え目な言い方をしているところを見ると、師匠に逆らうのはアメリカでも大変らしい。

<sup>27)</sup> 手元に原典がなく、鍋島 [56, p. 19] からの孫引きで代用する。

だが、このような正気が現在の比喩研究にどれほど浸透しているかは疑問である。この理性の声は少なくとも Lakoff と Johnson [31] には届いていないようだ。

#### 4.3 上位スキーマ経由モデルによる資源性に関する概念メタファー群の説明

資源性に関する概念メタファー群のを上位スキーマ経由モデルで説明してみよう。

(意味) フレームの階層ネットワーク (Hierarchical Frame Network: HFN) [50, 60, 61, 65] の分析を仮定した分析の概要は、図 5 に示す通りである。ただし、この図では、煩雑さを避けるため、意味フレーム全体を表わすことはしなかった。また、この図は部分的に不完全である。なお、図 5 に示した分析は、Lakoff らの資源スキーマ (resource schema) 付録 A による [[ TIME IS A RESOURCE ]] の説明の対案の根幹をなすものでもある。

##### 4.3.1 [[ TIME IS MONEY ]] の説明

$D$  は [[ TIME IS MONEY ]] が焦点化される領域で、 $I_4, I_5, I_6$  の具体化の関係から構成される。[[ (お) 金 ]] は [[ 資金 ]] の代表例であり、[[ 時間 ]], [[ (お) 金 ]], [[ 労力 ]] は [[ 支出 ]] の代表例である。 $f_1, \dots, f_6$  が概念メタファー写像である。これらを媒介しているのは、[[ 支出 ]] であり、これが図 3 の上位スキーマ  $H$  (の一部) に相当する。

- (103)  $f_1$ : [[ EXPENSE IS A FUND ]]  
 $f_2$ : [[ FUND IS AN EXPENSE ]]  
 $f_3$ : [[ TIME IS MONEY ]]  
 $f_4$ : [[ MONEY IS TIME ]]  
 $f_5$ : [[ EFFORT IS TIME ]]  
 $f_6$ : [[ EFFORT IS MONEY ]]

この分析が正しいならば、[[ TIME IS MONEY ]] と [[ TIME IS EFFORT ]], [[ EFFORT IS MONEY ]], ... の概念メタファーの部分的体系の基盤となっているのは、一般化された [[ 支出 ]] 概念である。

##### 4.3.2 [[ TIME IS A RESOURCE ]] の説明

$I_7$  が [[ TIME IS A RESOURCE ]] をコードする具体化の関係である。この概念化では、[[ 資金 ]] と [[ 資源 ]] との差別化によって [[ 資源 ]] の天然性の側面が強調される。従って、この意味での [[ 資源 ]] は非天然性の [[ 活動資源 ]] の代表例の一つである [[ 資金 ]]

の代表としての [[ (お) 金 ]] とは同一視可能でない。

図には示していないが、資源性に係わる概念メタファー群を媒介しているのは、 $I_1, I_2, I_3$  のルートにある [[ 活動資源 ]] であり、これが図 3 の上位スキーマ  $H$  (の一部) に相当する。

[[ 必要 ]] 性は [[ 資源 ]] 性の上位概念で、(7) の語彙類 (e.g., 〈 $Z$  が ( $Y$  するには)  $X$  が必要〉) によってコードされている概念だと考えられる (図 1 を参照)。[[ 必要 ]] 性は例えば、図 5 の [[ 生活必需品目 ]] によって具現化される。

私の分析が正しければ、Lakoff らは天然資源の概念、天然/非天然の区別を無視した活動資源の概念を混同し、なおかつ、活動資源の概念と資金の概念を混同している。こんな杜撰な概念分析で、いったい概念体系の何が説明されているのだろうか? 彼らの行なっていることは、「資源」という語の概念的曖昧性に無自覚であることに由来する牽強附会か、「資源」という語を概念的曖昧性をうまく利用して—つまり「資源」という語を比喩的に用いて—自説に都合のよい論点のすり替えを行なっていること以外の何ものでもないように思われる。

## 5 終わりに

### 5.1 まとめ

以上の分析から明らかであるように、常に [[ 時間はお金である ]] わけではない。(28) のデータはその一般化を退ける。

以上のことが示唆しているのは、次のことである:

- (104) 概念メタファー写像理論は概念メタファーの認定を厳しくしないと、説明力の過剰な説明を体系的に、とりとめもなく生成する。

これは明らかに言語事実の妥当な説明として好ましいことではない。

最後に、§4.1.2 で言及した一般性と例外性に関する錯覚が何に根差すかを考察し、この論文を終えることにしたい。

### 5.2 終わりに代えて: 限定された創造性

なぜこれほど例外性の錯覚、体系的錯覚という形になって現われるヒトの知性や認知の関する執拗な体系性への渴望があるのだろうか? 様々な奇想天外な失行症の症例を見れば、ヒトの知性や認知がどれ

ほど分散制御され、危うい体系性の上になりたっているシステムがすぐにわかろうと言うものなのに、体系性が無償で与えられるような説明は、妥当な認知の説明ではない。

N. Bernstein [5, 6] が看破したように、生物個体としてのヒトという存在を可能にしているのは驚くほど絶妙な調節/調整 (coordination) の体系である。その際に本質的に問題となるのは、自由度の過剰 (**excess degrees of freedom**) をいかに押さえこむかということである。このことを Bernstein 問題 (Bernstein Problem) と呼ぶが、この問題は、身体というシステムの固有の問題ではない。それは脳というシステムの問題でもあり、結局は認知というシステムの問題でもある。例えば、並列分散処理 (PDP) [46, 37] や M. Minsky の心の社会の理論 [38] はそのような洞察を捉えるためのモデル化である。これらが提唱されたのは旧世代の体系的人工知能 (Systematic Artificial Intelligence) の失敗が明白になり、対案が求められたからである。

だが、これが意味していることは何だろうか? 私には次のようなわけがあるように思われる: ヒトは限定された創造性 (bounded creativity) しかもたない。Chomsky が生成文法によって強調した文法の無限定の創造性 (unbounded creativity) が事実誤認のまやかしかつたように、比喩の無限定の創造性も事実誤認のまやかしかつである。ヒトが限定された創造性しかもたないのは、おそらくヒトが限定された理性 (bounded rationality) しかもたないのと同断である。このことは G. Gigerenzer らが彼らの主著 [17, 18] で説得力のある形で論じている。

言語であれ理解であれ、ヒトの限定されない創造性は、何につけ多くの人々が縋りたがっている神話にすぎない—限定されない理性がそうだったように。生成言語学を是正するために提唱された認知言語学が、なぜその神話を保存しようとしているのか? — 私にはその理由がさっぱり解らない。用法基盤の文法理論 (Usage-based Theory of Grammar) の理念は、少なくとも概念メタファー理論の枠組みにあっては実践も理解もされていない。

## 付録 A 資源スキーマ

Lakoff と Johnson [31, pp. 161–162] から資源スキーマの定義を引用する:

(105) The Time Is A Resource metaphor is a mapping that applies to a conceptual schema that characterizes what a resource is. This schema consists of a set of elements and a scenario indicating the relationship among these elements. This is what the resource schema looks like:

### THE RESOURCE SCHEMA

- a. The elements of the Schema:
  - A Resource
  - The User of the Resource
  - A Purpose that requires an amount of the Resource
  - The Value of the Resource
  - The Value of the Purpose
- b. The Scenario Constituting the Schema:
  - i. Background:
    - A. The User wants to achieve a Purpose.
    - B. The Purpose requires an amount of the Resource.
    - C. The User has, or acquires the use of, the Resource.
  - ii. Action: The User uses up an amount of the Resource to achieve the Purpose.
  - iii. Result:
    - A. The portion of the Resource used is no longer available to the User.
    - B. The Value of the Resource used has been lost to the User.
    - C. The Value of the Purpose achieved has been gained by the User.

This schema characterizes what is typically meant by a *resource* (actually, a nonrenewable resource). Given this schema, other concepts are defined relative to it, concepts like Scarcity, Efficiency, Waste, and Savings. Here are some examples:

### CONCEPTS DEFINED RELATIVE TO THE RESOURCE SCHEMA

**Actual Expenditure:** The amount of Resource used.

**Ideal Expenditure:** The least amount of Resource that could have been used.

**Scarcity:** The lack of enough of the Resource to achieve all of one's Purposes

**Efficiency:** The ratio of the Ideal Expenditure to the Actual Expenditure

**Waste:** The difference between Actual Expenditure and the Ideal Expenditure

**Saving:** The difference between the Actual Expenditure and a large expenditure that would otherwise have occurred.

**Cost:** The Value of the Actual Expenditure

**Worthiness (of the Purpose):** The degree to

which the Value of the Purpose exceeds the Value of the Resource required

これに続く [[ THE TIME IS A RESOURCE ]] Metaphor のどこがメタファーなのか, 私にはさっぱりわからない。これは明らかに単なる下位クラス化 (subclassification) = カテゴリー化 (proper categorization) である。二つの領域のあいだの写像がメタファーの十分条件なのであれば, 下位クラス化は全部メタファーである。そんな暴挙は許されてよいはずはない。従って, 私には, Lakoff と Johnson が カテゴリー化の定義を恣意的に狭め, メタファーの定義を恣意的に広げているとしか考えられない。

## 付録 B 資源性の低い名詞 (図 2 の残り)

図 6 に図 2 残りを示す。

## 参考文献

- [1] M. A. Arbib. *The Metaphorical Brain 2: Neural Networks and Beyond*. John Wiley and Sons, New York, 1989.
- [2] M. A. Arbib, E. J. Conklin, and J. C. Hill. *From Schema Theory to Language*. Oxford University Press, New York/Oxford, 1987.
- [3] M. Aronoff. *Word Formation in Generative Grammar*. MIT Press, 1976.
- [4] L. Bauer. *Morphological Productivity*. Cambridge University Press, Cambridge, 2001.
- [5] N. A. Bernstein. *The Coordination and Regulation of Movements*. Oxford University Press, 1967.
- [6] N. A. Bernstein. *On Dexterity and its Development*. Lawrence Earlbaum, 1996. edited by M. Turvey, translated from Russian by M. L. Latash. [邦訳: 『デクステリィー: 巧みさとその発達』. 工藤和俊 (訳). 佐々木正人 (監訳). 金子書房. 2003.]
- [7] J. L. Bybee. *Morphology: A Study of the Relation between Meaning and Form*. John Benjamins, Amsterdam, 1985.
- [8] J. L. Bybee. Morphology as lexical organization. In M. Hammond and M. Noonan, editors, *Theoretical Morphology: Approaches in Modern Linguistics*, pages 119–141. Academic Press, New York, 1988.
- [9] N. Chomsky. *Lectures on Government and Binding*. Mouton de Gruyter, 1981.
- [10] N. Chomsky. *The Minimalist Program*. MIT Press, Cambridge, MA., 1995.
- [11] N. Chomsky and H. Lasnik. The theory of principles and parameters. In J. Jacobs, A. von Stechow, W. Sternefeld, and T. Vennemann, editors, *Syntax: An International Handbook of Contemporary Research*. Mouton de Gruyter, Berlin/New York, 1993. [Reprinted in Chomsky (1995: 12–127), with slight revision].
- [12] T. C. Clausner and W. Croft. Productivity and schematicity in metaphors. *Cognitive Science*, 21(3):247–282, 1997.
- [13] J. L. Elman, E. A. Bates, M. H. Johnson, A. Karmiloff-Smith, D. Parisi, and K. Plunkett. *Rethinking Innateness: A Connectionist Perspective on Development*. MIT Press, Cambridge, MA, 1996. [邦訳: 『認知発達と生得性: 心はどこから来るのか』 (乾敏郎・山下博士・今井むつみ訳). 共立出版.]
- [14] C. J. Fillmore. Frames and the semantics of understanding. *Quaderni di Semantica*, 6(2):222–254, 1985.
- [15] T. Fontenelle, editor. *FrameNet and Frame Semantics*. Oxford University Press, 2003. A Special Issue of *International Journal of Lexicography*, 16 (3).
- [16] J. J. Gibson. *Ecological Approach to Visual Perception*. Lawrence Earlbaum Associates, 1979. [邦訳: 『生態学的視覚論』. 古崎ほか (訳). サイエンス社.]
- [17] G. Gigerenzer. *Adaptive Thinking: Rationality in the Real World*. Oxford University Press, 2000.
- [18] G. Gigerenzer, P. M. Todd, and The ABC Research Group. *Simple Heuristics That Make Us Smart*. Oxford University Press, 1999.
- [19] J. Gleick. *Chaos: Making a New Science*. Penguin Books, 1988. [邦訳: ジェイムズ・グリック (著) 『カオス — 新しい科学をつくる』 (新潮文庫). 大貫昌子 (翻訳).]
- [20] S. Glucksberg and M. S. McGlone. When love is not a journey: What metaphors mean. *Journal of Pragmatics*, 31:1541–1558, 1999.
- [21] S. J. Gould. *Hen's Teeth and Horse's Toes*. Norton & Co., 1983. [邦訳: 『ニワトリの歯 (上, 下)』 (早川文庫). 渡辺政隆・三中信宏 訳.]
- [22] J. Grady. *Foundations of Meaning: Primary Metaphors and Primary Scenes*. Ph. D. dissertation, University of California, Berkeley, CA, 1997.
- [23] J. Grady. Theories are buildings revisited. *Cognitive Linguistics*, 8(4):267–290, 1997.
- [24] J. Grady. A typology of motivation for conceptual metaphor. In R. W. Gibbs and G. J. Steen, editors, *Metaphor in Cognitive Linguistics*. John Benjamins, Amsterdam, 1999.
- [25] M. Hammond and M. Noonan, editors. *Theoretical Morphology: Approaches in Modern Linguistics*. Academic Press, New York, 1988.
- [26] G. Lakoff. The invariance hypothesis: Is the abstract reasoning based on image schemas? *Cognitive Linguistics*, 1(1):39–74, 1990. [邦訳: 不変性仮説: 抽象推論はイメージ・スキーマに基づくか? (杉本孝司訳). In 坂原 茂 (編), 『認知言語学的发展』, 1–59. 東

愛情	人気	水道	忍耐	希望	努力	資格	交友 関係	ムダ	暇	友人	野生 動物	三日	労働	手間	子供	交際	交通	十二 人	手間 暇	AVE
0.95	0.82	0.63	0.63	0.57	0.57	0.57	0.54	0.52	0.5	0.45	0.41	0.39	0.39	0.39	0.29	0.25	0.23	0.2	0.21	0.42
0.63	1.63	0.63	0.5	1.88	0.25	1	1.63	0	0.25	1.88	2	0.38	0.25	0.25	2	0.38	0.38	1.13	0	0.63
0.13	0	0.13	0	0.88	0	0.13	0.13	0	0	0.13	1.25	0	0	0	0	0	0	0	0	0.51
0.5	0.25	0.25	0	0.38	0	0.88	0.75	1	1.13	0.88	1	0.75	0.13	0	0.5	0.38	0.13	0.5	0	0.62
1.75	2	0.63	1.38	0.25	0.88	0.88	1.75	0	0.38	0.13	0.38	0	0	0	0.13	0.13	0.38	0.38	0	0.46
0.38	0	1.13	0.13	1.88	0.25	0	0	1.25	0.25	0	0.13	0.25	0.75	0.63	0.13	0.63	0	0.13	0.13	0.66
0.25	0.25	0.5	0.25	1	0.38	0.13	0.13	0	0.13	0.13	0.13	1	0.13	0	0.13	0	0	0.5	0.25	0.58
0.13	0	0.5	0	0.25	0.25	0	0	0.25	0	0	0.13	0.25	0.13	0	0	0	0	0	0.13	0.44
0.88	0.75	0.25	1.13	0.88	1.88	0.13	0.38	1	0.88	1	0.75	0.5	1.13	2	0.63	0	0	0.25	1.5	0.48
1.25	1.75	0.75	1.38	0.13	1	1.63	1.63	0	0.25	0.25	0.75	0.13	0.25	1	0.13	0	0.5	0.38	0	0.49
1.75	1.63	0.5	1.13	0	0.63	2	1.63	0	1.13	1.75	1	0.75	0.38	0.38	1	0	0.63	0.88	0.13	0.57
0.75	0.13	0.13	0	0.13	0.5	0.13	0.13	0	0.13	0.13	0	1	0.13	0.13	0.38	0	0	1.13	0.38	0.56
0.38	0.13	0	0	0.13	0.13	0.25	0.25	0	0.13	0.38	0	0.25	0.13	0	0.38	0.25	0	0.75	0.25	0.44
0.38	0.5	1.25	0.38	0	0	1	0.75	0.38	0.75	1.25	0.63	1.5	0.25	0.38	1.38	0	0.5	1.25	0.63	0.56
0.25	0.25	1.38	0.25	1.88	0	0.38	0.38	0.13	0.38	0.88	0.25	0	0.25	0	1	0.25	0.25	0.13	0.63	0.65
0.5	0.13	0	0.63	1	1.38	0.13	0.13	0.13	0.25	0.13	0	1.5	0.25	0.25	0.25	1.25	0	0.63	1.25	0.62
1.5	0.13	0	0.13	0.25	0.25	0.5	0	0.25	0.25	0	0	1.75	0	1.88	0.25	0.13	0	0.25	2	0.64
1.63	1.13	0.5	1.38	0	1.63	0.25	0.13	0.25	0.38	0.88	0.25	0.38	0.63	0.25	0.75	0	0.25	0.13	0.25	0.63
0.5	0.13	0.13	0	0	0	0	0.13	0.25	0.63	0.75	1.38	0.13	0.38	0.13	0.38	0.38	0.13	0.13	0	0.68
1.75	1.75	0.63	1.13	0	0.63	2	1.38	1.88	1.88	0.88	0.25	0.88	0.63	0.63	0.38	0.13	0.75	0.13	0.88	0.61
0.88	0.75	0.75	0.13	1	0.13	0	0.38	0	0	0.25	0	0	0	0.13	0.13	0.63	0	0	0	0.43
0.88	0.5	0.25	1.13	1.63	0.38	1	0.75	0	0.13	0.13	0	0.13	0	0	0	0.13	0.25	0	0	0.5
1.38	0.63	1	0	0	0.13	0	0.38	0	0.13	0	0	0	0.13	0	0	0.13	0.13	0	0	0.47
1.63	1.5	0.5	1.13	0.75	0.75	1.75	1.38	0.75	0.75	1.25	1.25	1	0.38	0	0.5	0.38	0.63	0.25	0.13	0.52

図6 名詞がコードする概念の資源性を基礎づける容認性のパターン (区間 [0,2] の平均値) [2,2] を橙色で, [1,2] を黄色で, [0.1,1] を薄緑色で着色

京: ひつじ書房.]

[27] G. Lakoff. Cognitive phonology. In J. Goldsmith, editor, *The Last Phonological Rule: Reflections on Constraints and Derivations*, Studies in Contemporary Linguistics, pages 117–145. University of Chicago Press, Chicago, 1993.

[28] G. Lakoff. Contemporary theory of metaphor. In A. Orthony, editor, *Metaphor and Thought*, pages 202–251. Cambridge University Press, 2nd edition, 1993.

[29] G. Lakoff. What is metaphor? In J. A. Barnden and K. J. Holyoak, editors, *Advances in Connectionist and Neural Computation Theory, Volume 3: Analogy, Metaphor, and Reminding*, pages 203–258. Ablex, Norwood, NJ, 1994.

[30] G. Lakoff and M. Johnson. *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press, 1980. [邦訳: 『レトリックと人生』(渡部昇一ほか 訳). 大修館.]

[31] G. Lakoff and M. Johnson. *The Philosophy in the Flesh*. Basic Books, 1999.

[32] G. Lakoff and M. Turner. *More than Cool Reason*. Chicago: University of Chicago Press, 1989. [邦訳: 『詩と認知』(大堀壽夫 訳). 紀伊国屋書店.]

[33] R. W. Langacker. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press, 1987.

[34] R. W. Langacker. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2: Descriptive Applications*. Stanford University Press, 1991.

[35] S. D. Lima, R. L. Corrigan, and G. K. Iverson, editors. *The Reality of Linguistic Rules*. John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia, 1994.

[36] J. Mandler. *Stories, Scripts, and Scenes: Aspects of Schema Theory*. Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, NJ, 1984.

[37] J. McClelland, D. Rumelhart, and The PDP Research Group. *Parallel Distributed Processing, Vol. 2*. MIT Press, 1986.

[38] M. L. Minsky. *The Society of Mind*. Simon & Schuster, New York, 1986. [邦訳: 『心の社会』(安西祐一郎 訳). 産業図書.]

[39] G. L. Murphy. On metaphoric representation. *Cognition*, 60:173–204, 1996.

[40] G. L. Murphy. Reasons to doubt the present evidence for metaphoric representation. *Cognition*, 62:99–108, 1997.

[41] C. C. Pagano and M. T. Turvey. Perceiving by dynamic touch the distances reachable with irregular objects. *Ecological Psychology*, 5:551–568, 1993.

[42] P. Pauwels. Levels of metaphorization: The case of *put*. In L. Goossens, P. Pauwels, B. Rudzka-Östyn, A.-M. Simon-Vanderbergen, and J. Vanparys, editors, *By Word of Mouth: Metaphor, Metonymy and Linguistic Action in a Cognitive Perspective*, pages 125–158. John Benjamins, 1995.

[43] J. Piaget. *Psychology of Intelligence*. Littlefield,



- Adams & Co, Totowa, NJ, 1966.
- [44] E. S. Reed. *Encountering the World: Towards an Ecological Psychology*. Oxford University Press, 1996. [邦訳: 『アフォーダンスの心理学』. 細田直哉 (訳). 新曜社.]
- [45] B. Rudzka-Östyn. Metaphor, schema, invariance: The case of verbs of answering. In L. Goossens, P. Pauwels, B. Rudzka-Östyn, A.-M. Simon-Vanderbergen, and J. Vanparrys, editors, *By Word of Mouth: Metaphor, Metonymy and Linguistic Action in a Cognitive Perspective*, pages 205–243. John Benjamins, 1995.
- [46] D. Rumelhart, J. McClelland, and The PDP Research Group. *Parallel Distributed Processing, Vol. 1*. MIT Press, 1986.
- [47] H. Y. Solomon and M. Turvey. Haptically perceiving the distance reachable with hand-held objects. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 14:404–427, 1988.
- [48] M. T. Turvey. Dynamic touch. *American Psychologist*, 54(11):1134–1152, 1996.
- [49] M. M. Waldrop. *Complexity*. Simon & Shuster, 1994. [邦訳: 「複雑系—科学革命の震源地・サンタフェ研究所の天才たち」(新潮文庫). M. ミッチェル・ワールドロップ (著). 田中 三彦・遠山 峻征 (翻訳)].
- [50] 中本 敬子, 黒田 航, 野澤 元, 金丸 敏幸, and 龍岡 昌弘. FOCAL/PDS 入門: フレーム指向概念分析/並列分散意味論の具体的紹介. [未発表論文: <http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/introduction-to-focal.pdf>], 2004.
- [51] 野澤 元. メタファーと適応的行動: 言語使用の行動生態学的アプローチ. In 日本認知科学会第 21 回大会発表論文集, pages 126–127. 日本認知科学会 (JCSS), 2004.
- [52] 野澤 元. メタファーにおける意味フレーム. In 日本認知言語学会第 5 回 *Conference Handbook*, pages 150–153. 日本認知言語学会 (JCLA), 2004.
- [53] 鈴木 宏昭. 類推と思考. 東京: 共立出版, 1996.
- [54] 鍋島 弘治郎. GENERIC IS SPECIFIC はメタファーか: 慣用句の理解モデルによる検証. In 日本認知言語学会第 2 回大会 *Conference Handbook*, pages 141–148. 日本認知言語学会 (JCLA), 2002.
- [55] 鍋島 弘治郎. メタファーと意味の構造性: プライマリー・メタファーおよびイメージ・スキーマとの関連から. In 山梨 正明 他, editor, *認知言語学論考 No. 2*, pages 25–109. 東京: ひつじ書房, 2003.
- [56] 鍋島 弘治郎. 領域を結ぶのは何か: メタファー理論における価値的類似性と構造的類似性. In 日本認知言語学会論文集第 3 巻, pages 12–22. 日本認知言語学会 (JCLA), 2003.
- [57] 鍋島 弘治郎 and 菊池 敦子. 「問題」の概念化: 認知メタファー理論の視点から. *関西大学文学論集*, 53(2):91–137, 2003.
- [58] 黒田 航. 認知 (科学) 的に妥当なカテゴリー化の (計算可能) モデルの提唱: 「放射状カテゴリー構造」と「クラスターモデル」を越えて. In 日本認知言語学会論文集 *Vol. 5*, pages 137–147. 日本認知言語学会 (JCLA), 2005.
- [59] 黒田 航. 領域とは何か? [URL: <http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/domains-properly-defined.pdf>], 2006.
- [60] 黒田 航 and 井佐原 均. 意味フレームを用いた知識構造の言語への効果的な結びつけ. *信学技報*, 104 (416):65–70, 2004. [増補改訂版: <http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/linking-l-to-k-v3.pdf>].
- [61] 黒田 航 and 井佐原 均. 日本語の意味タグ体系を定義する試み: FrameNet の視点から. In 言語処理学会第 10 回年次大会発表論文集, pages 148–151. 言語処理学会, 2004. [増補改訂版: <http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/jfn-nlp10-rev.pdf>].
- [62] 黒田 航 and 井佐原 均. 意味フレーム分析は言語を知識構造に結びつける: 文 “*x* が *y* を襲う” の理解を可能にする意味フレーム群の特定. In *KLS 25: Proceedings of the 29<sup>th</sup> Annual Meeting of Kansai Linguistic Society*, pages 326–336. 関西言語学会 (KLS), 2005. [増補改訂版: <http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/sfal-osou-kls29-paper.pdf>].
- [63] 黒田 航, 中本 敬子, and 野澤 元. 状況理解の単位としての意味フレームの実在性に関する研究. In 日本認知科学会 第 21 回大会 発表論文集, pages 190–191, 2004.
- [64] 黒田 航, 中本 敬子, and 野澤 元. 意味フレームに基づく概念分析の理論と実践. In 山梨 正明 他, editor, *認知言語学論考第 4 巻*, pages 133–269. ひつじ書房, 2005. [増補改訂版: <http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/roles-and-frames.pdf>].
- [65] 黒田 航, 中本 敬子, 金丸 敏幸, 龍岡 昌弘, and 野澤 元. 「意味フレーム」に基づく概念分析の射程: Berkeley FrameNet and Beyond. In 日本認知言語学会第 5 回大会 *Conference Handbook*, pages 133–153. 日本認知言語学会 (JCLA), 2004.
- [66] 黒田 航, 中本 敬子, 金丸 敏幸, 龍岡 昌弘, and 野澤 元. フレーム指向概念分析 (FOCAL) の目標と手法: Berkeley FrameNet を超えて. [未発表論文: <http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/focal-manifesto.pdf>], 2004.
- [67] 黒田 航 and 野澤 元. COE21 ワークショップ「メタファーへの認知的アプローチ」での口頭発表の際にフロアから出た質問に対する公式回答. [<http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/>]

- metaphor-and-frames-replies.pdf], 2004.
- [68] 黒田 航 and 野澤 元. 比喩理解におけるフレーム的知識の重要性: FrameNet との接点. [COE21 ワークショップ「メタファーへの認知的アプローチ」のための研究論文 <http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/metaphor-and-frames.pdf>], 2004.
- [69] 黒田 航, 野澤 元, and 中本 敬子. 比喩写像における“領域”は単なる副作用である: 「 $y$  が  $x$  に襲われた」に関する比喩写像の成立条件. In 日本語文法学会 第 5 回大会発表論文集, pages 205–214. 日本語文法学会 (SJG), 2004. [増補改訂版: <http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/domains-are-derivative-rev.pdf>].
- [70] 佐々木 正人. アフォーダンス: 新しい認知の理論. 岩波科学ライブラリー, 1994.
- [71] 三嶋 博之. エコロジカル・マインド: 知性と環境をつなぐ心理学. (NHK ブックス [881]). 日本放送出版協会, 2000.
- [72] 寺西 隆弘. 「メタファーによる理解」の柔軟性に関するトポロジー的考察. In 認知言語学会第二回大会 *Conference Handbook*, pages 149–156, 2001.